経済学文献を語る(2・完)

語り手
杉　本　俊　朗

1985年10月19日
杉本俊朗先生自宅書斎にて

聞き手
細　谷　新　治
（千葉商科大学）

菊　川　秀　男
（海事産業研究所）

程　島　俊　介
（中　央　大　学）

はしがき

本誌編集委員会は，経済資料協議会の創立30周年を記念して，協議会の初代会長であり，その後も引きつづき協議会のためにご協力を惜しまれない杉本俊朗先生から，経済学文献に重点をおいた個人史をうかがう，という企画をたて，1981年6月13，14日の両日，片瀬海岸の杉本先生のお宅にうかがった。そのときに聞き手の中心になった京大の細川元雄氏によって編集された記録が，本誌の No. 16 (1983, 6) に掲載された「経済学文献を語る～私と経済資料協議会の歩み～」である。

ところが，前回は時間の関係で先生のお話を十分聞くことができず，また折角テープからおこした速記録も，ページ数の関係でかなりカットせざるをえなかった。しかし，先生の豊富なお話をそのまま眠らせておくのはあまりにも惜しい，ということで編集委員会はこの続編を企画した。

なお，この聞き書の読者のために一言お断りしたい。全体の構成は大体前回と同様にした。この聞き書は前回の補完であるという事情を考えて，内容の重複はできるだけ避けたが，独立の記事としても読めるように工夫したため若干の重複は避けられなかった。また話のなかに出てくる文献の書誌的データは，後で調査をして，適当に文中に挿入した。

1 学生時代

武蔵高校時代

細谷 それではじめさせていただきます。最初に今日のヒヤリングの進め方ですが，はじめは前回の座談会のようにクロノロジカルに話をうかがい，前回の話では時間の関係でカットしたところや，記憶違いの訂正，またその後探されたいろいろな資料や本によって補充していく，というようなやり方ではいかがでしょうか。

杉本 そうしましょう。早速ですが，前回の座談会で少し日付に間違いがあるんです。

細谷 それはうかがっておきましょう。

杉本 まずこの日付，私の父が鉄道省をやめたのは大正14年でなくて13年です。

細谷 南武鉄道に入ったのは，その辞めた年の翌年ですか？

杉本 そうです。13年に辞めて，半年ぐらいブラブラしていた。どこか関西のもっと大手の私鉄とのあいだに話もあったらしいけれど，子供の教育上，今みたいに関西へ単身赴任というわけにいかないでしょう，みんな引っ越さなきゃならんから。それで断っちゃった。この当時は南武鉄道はまだ開通してないんですよ，建設準備時代ですから。昭和２年の春に登戸まではじめて開通したんです。

菊川 今の南武線？

杉本 南武線です。

菊川 川崎の方から？

杉本 川崎の方から，もちろん。少しずつ延ばして立川まで行ったんです。

細谷 その前年に先生は武蔵高校の尋常科に入られた。

杉本 大正15年ですね。前の座談会のときにそれ以後，映画ばっかり見てたようなことをしゃべってますね。

細谷 それが，建築の話はカットされなかったんですが，残念ながら映画の話はカットされちゃったんですね。

杉本 あれは残念。ぼくらが映画ファンだったときは，昭和４年以後で大恐慌の真っ最中だったんです。だからアメリカの映画も失業者とか，ああいう悲惨な状況の映画が多かった。アメリカの書物に「オンリー・イエスタデイ」とか，「アスピリン・エイジ」っていうのがあるでしょう。あれなどに描かれているような時代のふんい気というのをぼくらはアメリカの映画を見て知ったんです。

細谷 私は昭和５年の小学校卒業でしょう，だから全然そういう影響は受けなかったですね。

杉本　数年の差っていうのは大きいね。ぼくは当時，アメリカ文学なんかにもちょっと興味を持ったんです。だから映画を通じて，アメリカ語の勉強もしました。当時はトーキーが上映される前に例の対訳っていう本が出るんですよ。

細谷　このころからもうあるんですか，早いんですね。

杉本　その本を買って，それを一生懸命読んでから行くわけだ。

程島　どういうところで売ってたんですか。

杉本　本屋さんで売ってますし，ブロマイド屋でも売ってる店が当時あっちこっちにあったんです。武蔵野館のそばなんかにブロマイド屋があった。それから『キネマ旬報』とか『映画評論』とか，雑誌で情報を仕入れるんです。それをまず買って，はじめに勉強していくわけです。

細谷　先生もそうとうな映画ファンでしたね。

杉本　もう少し後になると「制服の処女」とか，ああいうドイツ語の映画の対訳もあった。ああいうのはドイツ語の勉強になった。

細谷　「制服の処女」は私の中学校のときで，溜池の葵館っていう映画館で見ました。

杉本　ぼくはそのころ中学３，４年ですが，１日３回ぐらい行ったな。まず10時から神田淡路町のシネマ・パレス。あそこで例のアベル・ガンスの「鉄路の白薔薇」を見た。あれ，もっと前に封切りになったんだけど，シネマ・パレスはそういう過去の名画を再上映専門にやってたんです。

菊川　名画座ってとこですね。

細谷　昔からあったんですね。

杉本　シネマ・パレスへ行って，それからすぐ近くの南明座へ行った。

細谷　南明座は覚えてます。

杉本　南明座を終わるとまた新宿へ行くっていうようなことやってました。新宿は武蔵野館でしょう。丸の内は邦楽座，戦後丸の内ピカデリーという名前に変った。それから浅草の大勝館。

細谷　葵館もそうでしょう。

杉本　いや葵館はセカンド・ランナー。

細谷　セカンドですか，あそこ。

杉本　葵館や南明座や牛込館や芝園館がセカンド・ランナー。翌週やるんです。もちろん安くなるから。

細谷　神田の救世軍本部の横の通り，今，さくら通りといっている通りの右側に東洋キネマというのがありましたね。

杉本　今あの建物は……。

細谷　写真のスタジオか何かになってますね。

杉本　あの建物は今，建築の連中が一生懸命あれの素性を探索しているんじゃない。

細谷　あれは例の東京建築探偵団の藤森さんなんかの調査によると，とても珍らしいダダイズムの建築なんですね。

杉本　あれも当時の日本的前衛（？）建築の代表作の一つですね。それでそういうバウハウスの建築とか前衛映画などから表現主義運動一般に関心をもつようになったんです。最近またこの時代の研究，アール・ヌーボーとかの出版物が多くなりましたね。

菊川　第一次大戦から20年代の研究がものすごく盛んですね。

杉本　経済学でも例の戦間期の研究っていうのが盛んになったね。

細谷　そうですね。

杉本　1920何年のベルリンとか，ああいう大きな本が出ているでしょう，平井さんていう立教のドイツ文学の先生の書いた本（平井正『ベルリン1918―1922　悲劇と幻影の時代』せりか書房　昭和55年），あれ面白いですよ。

菊川　先生は建築美術史をやろうと思ったが，結局東大の経済学部へ入ったとおっしゃってましたね。

杉本　そのことは大体前に話してある。だけど建築史をやる人は今でもそうですけど，工学部の建築学科に入るんです。美術史はもちろん文学部の美学美術史科ですけど，建築学科に入るにはやっぱり理科でないと受験できないんです。前にもチョイと話したけど，法隆寺再建論争なんかやった先生は，みんなこの建築学科の人ですよ。やっぱりいろいろ測量したりしなきゃならないからなんでしょうけど。

菊川　先生，この法隆寺の再建論争っていうのは時代的にはもう少し前から。

杉本　もちろん前からあって，当時すでに本が出てたんですけど，今みたいにたくさん本は出てないですよ。どこの部門でもそうですけど，こういう資料，『日本建築史基礎資料集成』なんていうのは高い本だけど，今随分出てるでしょう。中央公論美術出版とかああいうところから。岩波でも『大和古寺大観』とかたくさん出てますけど，当時はそんなになかった。前に「大橋図書館へ通って関野貞，天沼俊一先生などの著者を……」とあるが，天沼さんは京大の人です。ところがこの関野さんという大家が武蔵へ来て講義をしてくれた。武蔵ってのは面白いところで，こういう東大の大家を連れてきて，全校の学生に課外で連続講義を聞かせるんです。

細谷　１回だけじゃないんですか。

杉本　１回だけじゃないんです。普通の授業が終ってから，毎週１回ぐらいだったかな。関野さんが建築史と彫刻史をやった。その建築史の講義は後で，岩波から『日本建築史講話』とかいう本になって出てます。それから東北大の先生かな，あの『論

語』の大家の武内義雄先生も，何か儒学史かな，ああいう孔子や孟子の講義をやりました。

細谷　すごいですね。

杉本　ぼくら尋常科のころだったからそういうのは難しくってわかんないんだけど，そういう話を聞いていると，やっぱり後で関心を持ちます。その先生の本なんか出るとやっぱり買ってみたりのぞいてみたりする気をおこします。

細谷　それは全くそうですね。わかるわからないは関係ないですね。それで武蔵っていうところは授業にも偉い先生がたくさんいたんでしょう。

杉本　ドイツ語は吹田順助，相良守峯，小牧健夫，先生たちは非常勤です。

細谷　非常勤にしてもよくこれだけの一流の先生がそろいましたね。

杉本　専任の先生はドイツ語では国松孝二先生が6年春に新卒で来た。哲学は栗田賢三さん。栗田さんは東大哲学を出てすぐ来た。先生の専門は哲学ですが，ほかに論理，心理，作文，なんでも持たされるんです，高等学校っていうのは。だけど，あのころは要するに教科書なんていうのは大抵岩波なんだな，岩波哲学叢書です。論理学というと速水滉の『論理学』。ほかに本がないこともないけど。心理学っていうと高橋穣さんの『心理学』。小牧健夫さんは後で九大に行きました。吹田さんはもちろん商大予科の教授でね。

細谷　吹田さんはそのころから東京商大の先生だったんですね。

杉本　ええ，だって商大が大震災で焼けて予科が石神井に移ったから，石神井に教えにいった帰りに武蔵に寄るわけだ。同じ武蔵野線ですから。

細谷　吹田先生の自伝（吹田順助『旅人の夜の歌――自伝――』昭和34年，講談社）を見ると，先生はその縁で武蔵大学になっても非常勤講師で通ってたんですね。それから山本校長の亡くなった後，学生大会で吹田先生を次期の校長に迎えようという決議がされて，文乙の学生が数名先生のお宅へ交渉にいってますね。

杉本　へえ，それは知らなかった。それから後，関泰祐っていう一高の先生も来ていた。

細谷　ああ，あの岩波文庫のシュトルムの“Immensee”（『みずうみ』）の訳者。

杉本　関さんはどこか地方の高校から一高へ来たんじゃない？

細谷　はじめは新潟高校ですね。戦後は一橋大学にも来ていましたよ。

杉本　昔はドイツ語の先生は，英語もそうかも知れないけど，まず地方の高校へ行くわけだ。それで一高にポストが空くと一高へ来る。一高にしばらくいて，東大文学部ドイツ文学の定年教授が出るとその後へ行くわけだ。相良さんもそうですよ。相良さんは山形高校から一高へ来て，ぼくらの武蔵へも来て，それから東大へ行ったんですよ。吹田さんも山形高校でしょう。

細谷　途中通過駅でみんな武蔵へ行ったんですね。それで先生，武蔵の校長だった山本先生の話をしてくれませんか。知っている限りで結構です。

杉本　山本良吉さんは，西田幾多郎，鈴木大拙，藤岡作太郎と４人，石川県専門学校附属初等中学校の同窓生なんです。この学校は山本さんが在学中に第四高等中学校と改称されたんだ。例の四高です。ぼくが武蔵へ入ったころは武蔵の教頭だったんですが，その前に明治30年から33年までは静岡中学の教頭をしていた。ぼくの父はちょうどそのとき静中の生徒だったんです。そうして，父は特待生だったらしいんだ。３人特待生がいて……。父と，もう１人は清水の鈴与という会社の社長になった人，母方の親戚なんですがね。それともう１人。

細谷　鈴与ってあれですか，カマボコの。

杉本　鈴木与平，いやカマボコ屋じゃないですよ。清水に本拠のある回漕業からはじまった会社です。

菊川　ああ，『鈴与百七十年史』とか出している……。

杉本　あの鈴与です。あの鈴与の系図を見ると全部ぼくの母方の沢野っていう家から出てるんです。今度母が死んでから，いろいろ調べてみたのですが，その鈴与は当時は沢野通太郎で明治９年の高等商業出身だ。山本先生が特待生の進学指導をして，父は一高，鈴与は一橋へ行った。先生が静中を辞めて武蔵へ来るまで何をしてたかぼくは知らない。

細谷　山本先生の著作（『晁水先生遺稿』故山本先生遺稿編纂委員代表　内田泉之助編，故山本先生記念会発行，昭和26年。『晁水先生遺稿　続編』発行者　山本先生記念会　矢代源司，昭和41年）の『続編』の年譜を見ますと，先生は33年の３月に静岡中学を辞めてから，すぐその年の４月に京都府立第二中学校の教諭になって京都に移っています。それで41年にそこを辞めてその年に京都帝国大学学生監，42年には第三高等学校教諭を兼任しましたが，それは大正２年に辞めてます。だけど学生監はそのままなんです。それで７年に学生監を辞めて，東京に出て学習院の教授になります。これはそのころ院長をしていた北条時敬さんが呼んだんですね。北条さんは金沢の出身で，石川県専門学校で西田さんや山本さんに数学を教えた先生です。北条さんは西田さんがただ１人，先生と呼んだ人ですが，山本さんにとってもそうだったろうと思います。しかし，９年に北条さんが学習院を辞めたために一緒に辞めています。その年に欧米の学生生活状況の調査のため１年ばかり外国へ出張しています。これは文部省の命令ですが，その費用は北条が安宅産業に話をして出させた，と書いてあります。それで山本さんが武蔵の教頭になったのは，武蔵高等学校が創立された大正10年の12月ですね。

杉本　武蔵高校というのは根津嘉一郎が金を出してつくった根津育英会の事業なん

です。

細谷　『武蔵六十年のあゆみ』（昭和57年）という根津育英会のつくった学園史を見ますと，育英会の評議員に北条さんがいますね。北条さんが山本さんを呼んだんでしょうか。

杉本　それはわからないが，その可能性は大きいな。それで私の父は自分の中学の先生が七年制高校の教頭になったから，ぼくをそこに入れようってことになったんだ。それで山良さんはぼくらが卒業してから後で校長になったけど。

細谷　年譜を見ますと昭和11年ですね。

杉本　ぼくらのおったときの校長は山川健次郎です。

細谷　すごい人が校長ですね。

杉本　ああいう大物がやっていた。昔の東大総長です。

細谷　総長が校長をやってたんですか。

杉本　その前が宮内大臣になった一木喜徳郎。

細谷　いやまた。

菊川　山川さんて，会津の。

杉本　ああ，会津戦争のときに白虎隊にいた山川健次郎。東大総長を辞めたのは明治38年です。七博士事件のときの総長だもの。日露戦争のときの。

細谷　じゃあ，もう晩年ですね。

杉本　もう晩年です。それでぼくは山良さんに親子２代習ったんですが，山良先生はさっき言ったように西田幾多郎の友達ですが。

細谷　中学時代の同級生なんですね。それでさっきの『晁水先生遺稿』を見ますと，西田さんの思い出話しがのってます。これは山本さんが亡くなった後，あそこの校友会誌の『武蔵』が第49号（昭和18年３月）で「故山本校長追悼」を特集したんですが，これに西田さんが書いた「山本晁水君の思出」を転載したんです。これを見るとふたりがどんなに親しいかよくわかりますね。

杉本　その文章は『西田幾多郎全集』にも載ってるの？

細谷　私が調べたら載ってました。『第12巻』です。

杉本　山良さんが西田さんのことを書いたものがあるの？

細谷　一つだけ見つけました。『晁水先生遺稿』に載っている「京大を去った西田幾多郎博士」です。これは『西田全集』の第５巻にも転載されてます。これも親友でなければ書けないいいものです。

杉本　それで西田幾多郎伝というのがあるでしょう。そういう本にも山良さんのことが出てくるだろうね。

細谷　ありますよ。いろいろありますが，いちばんくわしいのはお孫さんの上田久

さんが書いたものです。（上田久『祖父　西田幾多郎』南窓社，昭和53年）この上田さんという人は西田さんの長女の弥生さんの息子さんで，旦那さんの上田操さんは西田さんが京大へ行く前に１年ばかり学習院で教えていたときの学生さんです。それで２人の結婚式の仲人は山本さんがやってます。それからもっとびっくりしたのは，上田久さんは武蔵高校を卒業して阪大で物理学を勉強してから武蔵高校の数学の先生をしてるんです。

杉本　それは知らなかった。やっぱり山良さんの縁で武蔵へ行ったんだろうね。

細谷　それで，この上田さんの伝記を見ますと，中学時代の同窓の西田，山本，鈴木，藤岡の４人は死ぬまで親友だったんですね。藤岡さんは早く亡くなり，鈴木大拙はアメリカに長くいってましたから，結局西田さんの生涯の親友というと山本さんがいちばんなんですね。上田さんは，幾多郎は若いときに藤岡作太郎から思想的に大きな影響を受けたが，晩年には，鈴木大拙と山本良吉の２人から大きな影響を受けた，と書いてます。

杉本　山良さんは教育者として活躍したから，そんなに本は書かなかったな。

細谷　私は『西田幾多郎全集』の手紙が載っている第18巻と第19巻を見たんですが，山本さんへあてた手紙はすごい分量ですね。それで，ちょっとひろい読みしただけなんですが，西田さんは人生の重大な危機のときには必ず山本さんに手紙を書いているという感じです。

杉本　山良さんの西田さんあての手紙はさっきの２冊の遺稿集に入ってるの？

細谷　それが不思議なことにないんです。遺稿集の続編に山本さんから大拙あての手紙が30通ばかり載ってましたけど。

杉本　西田家にはないのかねえ。山良さんはそんなに几張面にとっといたのにねえ。

細谷　私も変だと思って武蔵高校の事務長をしていた矢代源司さん，この人は山本先生の遺稿集の編集をやった方で，いちばん山本先生の著作や原稿にくわしい方なんですけど，その矢代さんに電話でうかがってみたんです。そうしたらやっぱりどうも西田さんのご家族のところにないようだ，と言っていました。

杉本　それは残念だなあ。何とか見つからないかなあ。

細谷　それは矢代さんもこれから上田久さんなんかによく聞いて探したいといっていました。山本さんが京大の学生監時代につけていた10年間の日誌なんかは残っているそうです。まだ遺稿集に入れなかったものがたくさんあるらしいですよ。

杉本　それは何とか活字にならないかねえ。

細谷　それで思い出しましたが，いつか京大の細川さんが京大の経済学の先生の戸田海市と西田さんとの関係を調べていて，戸田さんと山本さんとの関係があるかないかと聞いてきましたが，どうなんでしょうか。

杉本　戸田さんと西田さんは四高の教授のとき一緒だったんですが，戸田さんと山良さんも京大で一緒のときがあるね。さっきのあなたの年譜と細川君のつくったこの『戸田海市著作目録』（京都大学経済学部調査資料室　1983年）のなかの経歴とをつき合わせると，戸田さんは明治34年２月に四高を辞めて京大へ移ってる。だから明治41年に山良さんが京大の学生監になってから大正７年に辞めるまで京大で一緒だったわけだ。だから当然知らない仲ではないと思うね。

細谷　西田さんは，明治43年に京大の助教授になって京都に移ってますから，３人は京大で一緒のときがあるんですよ。だから西田さんを介して山本さんと戸田さんがつきあったということは考えられますね。

杉本　そのさっきの山良さんの京大時代の学生監日誌を見れば，戸田さんの名前も出てくるかも知れないね。それで，山良さんは修身の教科書に『善の研究』なんかを使うんですよ。中学生にですよ。

細谷　中学のときにですか。すごいですね。

杉本　試験問題に，「善の善たるは善ならず」なんていう問題が出る。禅問答みたいなのを中学生の試験に出すんだ。

細谷　この『武蔵六十年のあゆみ』を見ると，そのころの修身の教科書に西田さんと山本さんの共著の本がありますよ。（西田幾多郎；山本良吉『大正中等修身』巻１～５。弘道館，大正12年）これを先生は使ったことがありますか。

杉本　いや，それはない。そんなのあるなんて知らなかった。山良さんは娘さんしかいなくて，武蔵高校の英語の先生がお婿さんでしたが，横井さんていう。

細谷　ええ，矢代さんに聞いたんですが，横井さんは三女の旦那さんで，山本先生の４人のお嬢さんのうち，長女は亡くなり，後の方もみなよそへ出られて，結局山本家の後継ぎはいないんだそうです。

杉本　そうか。とにかく山良さんは七年制高校をつくったんですが，イギリスのイートンなんかをモデルにしてジェントルマン教育をやったんだ。だけど規則は実にやかましかった。あれをやっちゃあいけない，これをやっちゃあいけないと。例えば野球はだめなんだ。あれはアメリカニズムで野蛮だっていうんだ。スチールベースとはけしからん。盗むとはジェントルマンのやることではない。カーブなんていうのは人の目をごまかして相手をやっつけることで不正である（笑）。こういう教育理念なんです。だから当時の左翼運動に学生が感染するのを非常に恐れていた。ところが第１回第２回の卒業生が大学へ行くと，たちまちほかの高校の出身者と一緒になって運動をやり出して後輩をオルグする。昭和５，６年ごろだったか，学校へ夜陰に乗じてアジビラをよくまきに来ました。それで学校側はあわててましたよ。その連中は在学中は優等生でした。

細谷　先生，ここの卒業生で大塚弘さんていう人がいましたね。

杉本　大塚弘さん，彼は第1回の卒業生で，東大の美学の大塚保治先生の息子さんだ。お父さんは亡くなってから岩波で遺稿集が出ましたね。(『美学及び芸術論　大塚博士講義集Ⅰ』昭和8年) あの人の長男です。お母さんは例の佐佐木信綱の竹柏会の歌人，有名な女流文学者ですよ，明治時代の。

細谷　ああ，大塚楠緒子（くすおこ），有名な美人の文学者です。大塚先生の方が養子に入ったんです。

杉本　息子の弘さんは非常にできた人で，粟田さんにかわいがられて東大の哲学へ行ったのかな。そこで学生運動をやって中退になって復学したんだな。そうして戦前の岩波文庫でレーニンの『カール・マルクス』の翻訳を出した人です。あれは粟田さんと一緒にやって，ペンネームを使ってるんだ。（レーニン『カール・マルクス』伊藤弘訳　岩波文庫）

細谷　そうですね，大塚弘じゃない，伊藤弘ですね。

杉本　戦後の改訂版（レーニン『カール・マルクス』大塚弘訳。岩波文庫　昭和21年）で粟田さんがそのことを序文で書いています。彼は戦死しちゃったんですね。

細谷　中国で。

杉本　中国じゃない，南方で。ぼくが東大の学生のとき，彼はトーマス・マンが好きで『ブッデンブローク』を翻訳したんです。どっかで出したいといって，ぼくが改造社に知ってる人がいたんで頼んで改造文庫に入れてもらった。2冊ぐらい出ました。黄色い紙表紙になってからです。

細谷　先生が一流のドイツ文学者だから，そういう学生が出るんですね。

杉本　そうでしょうね。

細谷　それで，大塚さんは先生と何年開きがあるんですか？

杉本　あれはねえ1回生だから，ぼくは6回だけど，尋常科2年を2度やったから，ぼくは一度死に損ねたんだ，肺炎で。だから実際は5年。1回と5回だから4年違いかなあ。

細谷　やっぱりそのころから大塚さんは有名だったんですか。

杉本　ええ。それで楠緒子さんは早く30代で亡くなって，お父さんの保治先生は後妻をもらったんです。その後妻の娘さんが，大内力さんの奥さんの節子さんです。力さんが婚約する前に兵衛先生から弘さんのことをたずねられましたよ。それでさっき忘れたんでちょっと元へ戻るけれど，当時武蔵は優等生を海外に旅行させる慣行があったんです。それで大塚弘さんともう1人，理科の人かな，2人があれ昭和何年ごろですかね，ぼくらが在学中，高等科の学生として外国に，どれくらいの期間か忘れましたけど，見学に派遣されました。何か武蔵のモットーがあるんですよ。「海外に雄

飛するような人物をつくる」っていうのが。あの学校のモットーの一つにあったんです。「雄飛」っていうのはどういう意味か，昔流の表現ですから，まあ国際人っていう意味なんでしょうね。

細谷　それで大塚さんは外国へ行ったんですね。

杉本　そう。だけどぼくらが高等科のころはもう制度はなくなっていた。ちょっと元へ戻って高等科の話を少ししましょう。尋常科の1年に80人入っても高等科へ進むときにはかなり減っちゃうんです。高等科へ進むとき40人40人で文科と理科にわかれるんですが，文科に上がるときに一応試験みたいのやるんです。入学試験じゃありませんけど。文科と理科の志望は本人が選択できるんですが，どうしても数がアンバランスになるでしょう。それを補充するために普通の中学卒業生を入試して採るんです。それでもぼくらのとき文科でも5人ぐらいしか採りませんでした。その5人のうちに入ってきたのが，宇佐美誠次郎と鹿子木健日子。これは員信の息子，ケーニヒ（König）っていうんです。鹿子木員信さんは昔ドイツに留学してポーランド系のドイツ人と結婚したわけです。その長男がそのケーニヒなんです。健日子でケーニヒと読ませるわけですよ。背が高くて6尺ぐらいあった。五中から来たんだ。宇佐美は七中から来たんです。あと3人は地方から来た。

細谷　そのケーニヒさんはその後どうなったんですか。

杉本　ケーニヒは，彼はまあ背が高いからバスケットのセンターをやって，当時インター・ハイで優勝しました。それからサッカーもやったな。東大の経済学部へ来てもバスケットやって，ベルリン・オリンピックに出ました。彼は卒業してから日産自動車に入って，途中で辞めちゃった。終戦のころ日産は縮少したでしょう，あの大ストライキをやったりして。それで辞めてから，今アカネ商会っていう，何か日本の陶器を外国へ輸出する会社をやってますよ。彼のお母さんが鹿子木ネリーっていうんですが，日本名は錬子。

細谷　ポーランドの方ですね，員信さんの奥さんは。

杉本　そう。錬子さんはずっと武蔵のドイツ語の会話の先生をしてた。それから方々の学校にもドイツ語を教えに行ってました。

細谷　ぼくらの時代まではまだ鹿子木さんの『アルペン行』なんていう山の本を読みましたよ。

杉本　員信さんはもともとは海軍軍人です。日本海海戦にも参加してるんだ。それで戦争が嫌になっちゃって海軍を辞めてアメリカに行って哲学を勉強したんです。それからヨーロッパへ渡ってベルリン大学かどっかで勉強したんだ。そのときにスイスへ行ってアルプスの山登りをやったんでしょう。

細谷　あの本はたしか大正のはじめの本ですが，ぼくらの予科時代，昭和10年ごろ

までまだ読まれてたんです。

杉本　彼は昔の日本山岳会の会員ですよ。彼はヨーロッパから帰ってきて慶応大学の哲学の先生になった。慶応はそんなに長くなかった。それからどっかほかの大学に行って，それから九州大学の教授になったんだ。

細谷　槇有恒の『わたしの山旅』（岩波新書）に出てきます。槇さんたちが大正のはじめに慶応に山岳会をつくったときの相談役ですね。槇さんは鹿子木さんのことをすごく尊敬してますよ。

杉本　まあ，彼はロマンチストだと思うんです。後であんな右翼思想になったんだけど。それで戦後，戦犯になったんですが，病気したため釈放され，間もなく亡くなりました。員信さんはドイツ留学中ポーランド人と夫婦になったんです。ところが思想が日本主義みたいになっちゃったんで，ネリーさんは離婚したんです。だけどその後も鹿子木の姓を名乗ってたんだから，あれ戸籍上はどうなってんのかな。ともかく別れちゃった。それで錬子さんは子供2人を抱えてドイツ語の先生しながら生活してたんです。宇佐美はそういう風に途中から武蔵に来たから，鹿子木と仲よかったです。

細谷　外から来た同志ということで。

杉本　それでぼくらは鹿子木先生の家に行ったことがある。夏は野尻湖に行ってましたよ。

細谷　あのころ外人は軽井沢と野尻湖に行ったんですね。

杉本　錬子さんも戦後いつか亡くなられました。彼女はポーランド系でしょう。大体ポーランドは国を分裂されちゃったんで近隣の国へ……。

細谷　それでポーランド人は方々へ亡命したんですね。

杉本　芸術家はパリへ行く，学者的な人はドイツの大学へ行くっていうので，ローザ・ルクセンブルグもそうですけど。ですから錬子さんもたしかドクトルですよ。どっかのドイツの大学でドクトルを取った。まあ，武蔵っていうのはそういうわけで，なかなか面白かったんです。

細谷　独特の学校ですね。

杉本　だからそう，東大受験のためにワイワイやるってことはしなかったんだな。

細谷　それはもちろん，こういうやり方だったら……。

杉本　放っとけばいいという，放任主義ですよ。

細谷　伸び伸びとやったわけですね。

杉本　だけど，東大には全国一の入学率で入っちゃう。尋常科から高等科に入るとき絞っちゃうから，率は上がる。

細谷　悪いのは落ちちゃう，高等科に入れない。優秀なのだけ残ったわけですね。

杉本　どうしても自信のないものはよそへ行くわけです，はじめから。当時は京大

や東北大は無試験ですからね。

細谷　あのころは。

杉本　入試をやったのは東大だけでしょう，法文系では。

細谷　全然今と違いますね。

杉本　京大の経済学部でも無試験だもの。東北大は東大の発表後でも入れるんだもの。のんきなもんですよ。

細谷　今は東北大学に入るのは大変だ。

杉本　東北大の経済学科なんていうのは30人です，定員は。それでも定員に足りなくて，それでしょうがないから高等商業とか私立大学の予科の卒業生に呼びかけた。彼らも官立大学受験の資格があったんだ。九大もそうです。のんきなもんです，昔は。それから神戸商大なんかがぼくらのところに勧誘に来るんだ。パンフレットなんか送ってきて，高等学校卒業者歓迎なんていって。

細谷　夢のようですね。

杉本　ですから，特に西田哲学や田辺哲学をやりたいっていう人は京都をはじめから志望していた。東大の哲学ってのは当時はあまりぱっとしなくて。

細谷　まだ和辻先生の時代じゃないですか，その前……。

杉本　和辻さんはまだ京大時代で，東大に来ないころですよ。和辻さんはぼくが東大へ入った年の夏に京大から東大に移ったんだ。吉田静致さんという倫理学の先生が辞めてその後任なんだ。

細谷　大正から昭和のはじめは，やっぱり優秀な人が全部揃っちゃったんですね，京大には。

杉本　林達夫とか三木清，ああいう人は全部あっちへ行っちゃったんじゃないの，あのジェネレーションの人は。

細谷　そうですね。東大というと，『岩波哲学小辞典』をつくった伊藤吉之助さんとか，その時代……。

杉本　桑木厳翼とか，伊藤さんでしょう。桑木さんなんかぼくらが入った年の翌年の10年に定年になったんだな。伊藤さんが主任教授じゃないかな。

菊川　出隆さんは……。

杉本　出さんは桑木さんのお弟子でしょう。桑木さんが退職してから教授になったんじゃないかな。出さんのあの『哲学以前』という岩波から出ている本，あれなんかがぼくらの高等学校のときの一般教養なんだ。

細谷　わたしたちの世代でも倉田百三，出隆っていうのは誰でも読みましたね。あの本は西田哲学の入門書ですから。それから『善の研究』，これがあのころの学生の読書コースです。『哲学以前』ていうのは面白かった。

杉本　それと岩波講座の『世界思潮』っていうのがあったんです。これは昭和3，4年に出たもんじゃないですかね。岩波の講座もののはじめじゃないかな。

細谷　たぶんそうだと思う。昭和に入ってすぐです。

杉本　あれははじめは白い本で，後の岩波講座っていうのはみんな黄色い分冊の薄っぺらいので函に入ってたでしょう。はじめのころは1冊ずつ出ていて，それをまた岩波が製本したやつが古本屋なんかにあった。あれはぜひ高等学校時代に読まなきゃならんというんでそれを買って読みましたよ。

細谷　あれは監修者は坂口昻先生ですか。

杉本　いや，あれは三木清や林達夫なんかだ。

細谷　ああ，そうですか。タイトルが似てるんで……。

杉本　坂口さんの本は『概観世界史潮』。あれもあのころの歴史の必読書だったな。

細谷　これは必ずみんな……。

杉本　あの人は京大の西洋史の教授です。それからこの校正刷は今度『河上肇全集』の続4巻（『マルクス資本論略解ほか』）の月報に書いたもの（「『資本論入門』への入門の道程」）ですが，本巻に関係したようなことを書かないといけないから狭い範囲のことしか書いていません。要するに経済学を何から読んだかってことがちょっと書いてあるんです。

細谷　ああ，これですね。

杉本　これ，今月の10日に発売になったんです。そこに何で経済学部に行くようになったかというようなことが書いてあるでしょう。

細谷　これはいいですね。当時の学生の読書の傾向がよくわかりますね。あれっ，先生，最初に読んだという『経済学大綱』をまだお持ちなんですね。

杉本　あります，そのときのが。ちゃんと上篇は「昭和八年八月二十三日読了」，下編は「九月一日一五日」と鉛筆でおしまいに書いてあるんですよ。

細谷　高校3年の夏休みに読んでるんですね。

杉本　いよいよ経済学部しか行くとこがないからというんで読んだんだ。さっき言ったように武蔵っていうのはお坊ちゃん学校で，できるだけ外界と接触することを禁ずるわけです。温室教育なんだ。せいぜいほかの七年制の成城とか学習院，成蹊とはスポーツなんかのつきあいをやらせるんです，剣道の試合とか。それ以外の，東京高校は七年制だからよかったんだけど，浦和とか一高なんていうのとはあまり接触を好まなかったんだなあ，どういうわけか。それで第一，帽子に白線を巻かせないわけです。昔は高等学校の学生の帽子は全部白線を巻いてたでしょう。白線を巻かせないからみんな普通の帽子を被ってると，場所が尋常科と一緒だから，中学と高等学校になっても間違えられちゃう。それでみんな嫌がって，高等科へ行くと，ひそかに白線を

どこからか買ってきて，外を歩くとき白線を巻くようなやつも出てきた。

程島　先生，武蔵だけなんですか，高校で白線を巻かないのは。

杉本　私立高校は白線なしだったのかしら。それで大体，武蔵っていうのは，つまり山本良吉さんの理想はイングリッシュ・ジェントルマンなんです。武蔵をイギリスのイートン，ハローのような学校にしたいっていうんです。ああいうエリート教育みたいな。それに対して学生は抵抗するわけですね。それでそういった官立高校出に負けないようにっていうんでやったんだ。東大へ行っても官立の連中は社会科学研究会か何とかをやってて，社会科学の勉強をやってるのに，こっちは全然そういうことをやれない。それで武蔵の卒業生は，さっき言った大塚さんとか，そういう連中が東大に行って早速学生運動なんかをやるわけだ。そうして後輩を啓蒙するためにアジリに来るわけだ，ビラまきに来たり。それを学校当局は恐れて，それで体操の先生なんかが，そういう卒業生が後輩をアジリに来るのを警戒して，教室でそういうのに係るなとか，盛んに言うわけです。そうすると逆に反発するわけでしょう。それでともかくそういう官立の人々に伍していくためには勉強しなきゃいかんというのでドイツ語の本で経済学を少し読んでおこうということになったわけです。

それで経済学部に何で行ったかっていえば，要するに当時の大不況で，そんな文学部なんかへ行ったって食えないんですよ。ぼくらの同期でももちろん東洋史へ行ったり，国文学へ行ったり，日本史へ行ったのはいますけど……。

細谷　それは先生，武蔵の東洋史の先生の三島一さんの影響がありますか。

杉本　ありますね。三島さんは明大の教授で東洋史を教えに来てたんです。

細谷　そういう偉い方の影響って大きいですね。

杉本　ですから三島さんの家へぼくは同級生の宇佐美誠次郎とよく遊びに行きましたよ。まあいろんな当時の若い歴史学者の，今有名な人たちが学生とか学校を出たてで来てましたよ。三上次男さんとか石井孝さんとか，幕末史の。あの人はまだ学生だったな。それから鈴木俊っていう東洋史の人とか秋山謙蔵なんかも来たな。

細谷　それでちょっと飛んで，御茶の水科学ゼミナールのことですが，これは前回にも割合にカットしなかったですね。

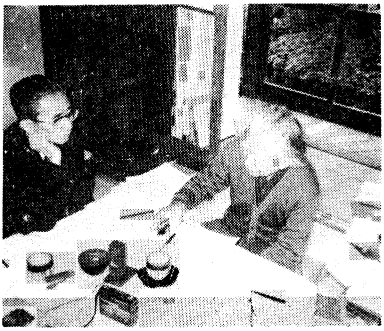
杉本　これはなぜかっていうと，あの戦前の科学運動っていうのかな，これを戦後誰も書いていないからですよ。これに出た講師だった人がほとんど亡くなった。戸坂潤，三枝博音，岡邦雄，羽仁五郎，野原四郎。杉本栄一も死んだ。河西太一郎はまだ大阪で生きてるらしい。石浜知行，佐々弘雄，安田徳太郎，みんな亡くなっちゃったんです。実際にこの企画をやった財部健次さん，この方も前回に書いたように亡くなっているんです。佐木秋夫さん，この方はまだ健在のはずなんです。

細谷　ええこの人はお元気です。

杉本　宗教学者。

細谷　まだ盛んに書いてます。

杉本　佐木さんに聞けばこのときのことを知っているでしょう。実際この財部さんと佐木さんが，申込みに行くと，事務をやっていたんです。このときぼくみたいに聴講者になった者が誰だかわからない，当時学生ですから。



細谷　名簿はこの人に聞かないとわかりませんね。

杉本　そういう名簿みたいなものが保存されているかな。ぼくなんかも聴講券や何かを持ってたんだけど，この後，唯物論研究会の連中がみんな捕まったりして……。これは別に唯研が直接関係したわけじゃないけど，メンバーは唯研の連中ですよ。

菊川　岡邦雄さんなんか……。

杉本　ええみんな大抵そうです。それでぼくらは学校を卒業してたから，13年ごろでしょう，唯研事件は。それでこういうのを保存しとくと後でまずいかもしらんというので処分したらしくて，ないんです。

細谷　唯研が解散したのは昭和13年です。

杉本　13年でしょう。ただテキストだけは保存してあるんです。これは前の座談会のときに見せたでしょう。

細谷　ええ拝見しました。あれは貴重なものですね。

杉本　だけどその時間割みたいなのが残っていない。もちろんそういうのはあったんです。だけどそれがもう処分してなくなったので……。ただテキストが残っているので誰がどういうことやったのかっていうのはこの前割合にくわしくドイツ語か何かで書けたわけです。受講料もいくらだかわかんなくなっちゃったんです。だけどほかの聴講者ってみんな東大の学生で，それも小人数でした。実際の人数が何人かってことはあまりはっきり覚えていないんです。ともかくせいぜい20人ちょっとです。とうてい経営的には成り立ちっこないんです。この財部さんていうのが，深川の海産物問屋の息子でお金持ちだった。一種の道楽仕事でこういう科学セミナーをやったんです。

程島　すごいお金持ちだったんですね。

杉本　ゼミナールはたしか1年限りで終わっちゃったでしょうね。これより何年か前にもプロレタリア科学研究所がこういうことをやったんです。だけどプロ科は大体語学の講座ですね。

細谷　これはあれですか，プロ科のメンバーだけでなくて学生さんみたいなものも

……。

杉本　先生はプロ科の人，プロ科が主催で，聞くのは誰でもいい。

細谷　一般の人を募集した，ああそうですか。

杉本　小椋広勝さんなんかドイツ語かなんかの講師をやってたんですよ。武藤丸楠なんていう人，それから英語は松本正雄，その募集要綱をぼくはとってあったんです。プロ科の何とか講座の。それはもう少し前です。それはたしか今の文化学院の建物を使ってやったんです，あの駿河台の。今もあるでしょう，文化学院は。

細谷　もちろん盛んです。

東大経済学部大内兵衛ゼミ

菊川　それではこれから東大経済学部時代に入りますが，前回は時間の関係ではしょった大内兵衛先生のゼミナールの話を聞かせて下さい。

杉本　ゼミはね，２年からあるんですが，はじめは土屋喬雄先生のところ，大内先生は申し込んでもなかなか当たらないという恐れがあったんで，まず土屋先生に申し込んだら，土屋先生がO. K. になったのに，大内先生の面接が後になってしまった。それで後になった大内先生の方も採用になったんで土屋さんの方はお断りしたってことです。10年度の大内ゼミの２年生はぼくと宇佐美の２人で，後は全部３年生です。３年生はその前の年の夏休みに農村財政の実態調査をやっていたんです。

細谷　あっ，そうですか。先輩は向坂正男さんとか。

杉本　いや向坂君は１年後なの。

細谷　ああ後ですか，先輩は。

杉本　先輩は山本二三丸君が３年生で，１年だけ一緒でした。山本君はもともと土屋ゼミなんです。

細谷　そうですか。二三丸さんは１年先輩ですか。

杉本　彼は３年のときぼくらと一緒に大内ゼミにも入ったんです。あのころはゼミは二つとれたんです。だけどいわゆる今でいう単位は一つだから，どっちかの先生につけてもらえばいいんです。参加は二つできたんです。

細谷　それとほかの人は。

杉本　後もう１人，終戦後発疹チブスが流行ったころ，あれで死んじゃった人がいるんです。誰だっけかな。あれは生きていたら非常に優秀だった人なんですが。彼は脇村さんが牢屋から出てきてから帝国燃料の調査部長をやっていたとき，そうだ，新宮勉さん，戦争中，脇村先生の下にいた人ですから。菊川さん，今度，脇村先生に聞いてごらんなさい，新宮勉さんを覚えてますかって。

菊川　帝国燃料ですか。

杉本　帝燃です，あれ銀座の並木通りか，あすこら辺にあったんです。脇村さんが保釈になって出てきたとき，そこに就職したんです。

菊川　戦争直後ですか。

杉本　いや戦争中，例の教授事件で出てきて。新宮さんは山本君の親友でした。この人は生きていたらいわゆる『資本論』学者になってたと思いますけど。

菊川　じゃあ，脇村先生は覚えておられるでしょうね。

杉本　それで，3年生の農村財政の実態調査の報告を聞きながら同時に『資本論』の本源的蓄積のところの講読をやったんです。それと地代論のところ……。

程島　これは2・3年一緒ですか。

杉本　もちろん2・3年一緒だったです。だから大内先生は1週間に1回しかやらなかったんじゃないかな，合同でやってましたから。だって2年は2人しかいないんだもの。

程島　3年生も2人ですか。

杉本　いや，だから前の2年のときから参加してた人のほかに，山本と新宮がぼくらと一緒に新たに加わったんです。

細谷　新宮さんのほかにもまだいらっしゃったんですね。

杉本　ええ，10人ぐらい前年度からいましたよ。当時の『演習日誌』なんていうのが残ってるんです，ガリ版でつくった。

菊川　宇佐美先生の『学問の五十年』という本を読みますと，『演習日誌』のことが出ています。

杉本　出ている？　ゼミの日誌とか夏休みの便りとか各人の報告を後で謄写版にしたもんです。ぼくのところにも保存してあります。

細谷　ありますか。

杉本　この『演習日誌』は10年と11年の2度しかなかったのかな。

細谷　1年しかなかったって宇佐美さんは書いてます。

杉本　あっ，そう。それからさっきの話で，ぼくはもう一つゼミを出たんです。渡辺信一っていう助教授の人，農業政策のゼミです。

細谷　この大内ゼミのレジュメはけっこうくわしいですね。

杉本　それはみんなのゼミのレポートのレジュメです。ぼくは何かマニュファクチュアのことやってたんじゃないかな，分業か何かの。こっちは前年度の農村財政調査のレジュメですけど。

細谷　ゼミ旅行なんかもしてるんですね，箱根旅行。

杉本　ああ，そのときの写真がありますよ。この前のときにあなたは昭和10年に大内ゼミであのころ『資本論』をやれたんですかって言ってたけど，大内ゼミじゃ『資

本論』をテキストに使ったんです。

細谷　そうですかねえ。

杉本　ちょうど当時は資本主義論争の関係もあって農業問題がトピックスだったから，地代論をやったんです。第1部の本源的蓄積のところとか，第3部の資本主義地代の生成のところとか。

程島　そのときはアドラツキー版？

杉本　アドラツキー版はこのころ出たんです。1932年に出版されてこのころ輸入されてきた。ぼくは覚えてますけど，あれは一度には出ないで，第1巻がまず出て，その第1巻をぼくは駿河台下の丸善の神田支店で買ったんです。以前は中西屋といってた。場所は駿河台下で今の崇文荘書店のあたりだった。まあ，あのころ戦前は，大竹博吉さんが東洋キネマのちょっと手前あたりではじめたナウカ社ももちろん，ソヴェート専門ですから，輸入をしてましたけど，ぼくは丸善の支店で買った記憶があります。

細谷　ちょうどその直後に発禁になりますんでしょう，もう。

杉本　いや，発禁ていうけどね，『資本論』のアドラツキー版をぼくはね，昭和13年ごろ，人のためにモスコウから取り寄せてあげたことがあるんですよ。

細谷　へえ，信じられないですね。

杉本　それは後の話ですが，ぼくが東洋経済にいたとき，東洋経済に代理部っていうのがあったんです。代理部っていうのは何かというと，要するに本を丸善から取り継ぎしてくれるんです。それとか社員のためによその出版社の出した本を取り継いでくれるわけだ，同じ出版社だから。

程島　本だけを。

杉本　本だけをやるんだ。だから外国の本を買うときは，自分の東洋経済の代理部を通じて丸善から買うとディスカウントしてくれるんだ。ぼくは慶応の豊田四郎のゼミの学生で，卒業して名古屋の会社にいる人が是非欲しいと言っていると，豊田君から頼まれて，東洋経済を通じて丸善に注文したら，ちゃあんと入ってきたんだ，15年ごろ。

細谷　それは先生，間違いじゃないですか。だって昭和10年には持ってるだけで引っ張られたぐらいでしょう。

杉本　それは極端な言い方で，当時の特高なんていうのは押収に来たってドイツ語の本，外国語の本なんかは何が何だかわかりはしないですよ。

細谷　そうですか。日本語で「社会」なんて名の入った本は駄目だったといいますね。

杉本　日本語だと「社会」とか，それから著者の名前を見て，山川均とか，猪俣津南雄，河上肇っていうと何でも持ってっちゃう。大熊信行さんの『マルクスのロビン

ソン物語』も持ってっちゃうわけです。マルクスって書いてあるから。

細谷　特高はそんな区別つきませんよね。

杉本　そうなんです。特高の下っ端の刑事なんていうのは中学卒位で巡査になったのかな，昔は。

細谷　それはそうですよ，先生。昭和の一けたに大学を出たおまわりさんなんかいやぁしませんよ。

菊川　高小，尋常高等小学校の高等科ぐらいじゃないですか。

細谷　いわゆる交番のお巡りさんていうのは小学校出ぐらいではないでしょうかね。

杉本　それでゼミの3年のときはスミスの『国富論』をやった。そのときはぼくら2人しか残らないでしょう。そうしたらまた1年下の連中が入ってきた。それから3年生で新しく1年だけ加わった人がいます。

2　東洋経済新報社から世界経済調査会時代

東洋経済新報社時代

細谷　それでは東洋経済新報時代に入りましょう。

杉本　これはね，桝井義雄さんが書いてぼくに送ってくれたんだけどね。（桝井義雄「経済記者からの〝上昇〟」『書斉の窓』第267号，昭和52年9月)。52年ですから8年前に書いたんだ。

菊川　連袂辞職の話も出てくるんでしょう。

杉本　そんなくわしいことは書いてないです。東洋経済を辞めて大学の先生になってるのはどういうやつがいるか。東洋経済から大学の先生になるのは上昇したと，大学の先生の座談会で言っているが，そんなのはおかしい。雑誌社の記者だって大学の先生だって別に変わりはないよなんていう趣旨のことを書いてるんだ。自分を例に挙げるのはおかしいが，こんなのは別に特殊な例じゃないよと。そこにぼくらのことが書いてあるんです，一緒に辞めてるのはどういう事情かなんてことを。

細谷　先生が東洋経済を辞めた事情は前回あまり話さなかったですね。

杉本　その前にちょっとこれを見てよ。ぼくは今度の『河上会々報』に「鈴木重歳さんの思い出」というのを書いたんです。鈴木さんていうのはこの前にも出たが，河上肇のお嬢さん，芳子さんのお婿さんで東洋経済にいたんだ。

菊川　河上会というのは東京の……。

杉本　そう，東京河上会。これね，月曜日に本年度の河上会の総会があるんですよ。それに間に合わせたんです。それでぼくらが東洋経済を辞めたいきさつもこっちの方がくわしいと思いますよ。

細谷　そうですね。ですけど，これはあまりみんなが見られませんから，ちょっとさわりを話していただけませんか。

杉本　重歳さんは前にも話したように京大経済学部を10年に卒業してゼミの先生の蜷川虎三さんの世話で河上先生の次女の芳子さんと結婚したんです。ぼくが東洋経済に入ったときは，もう東洋経済に入社していて“Oriental Economist”という英文の月刊誌を編集していました。

12年6月に河上先生が小菅の刑務所から出てきたとき，天沼の重歳さん夫妻の家に落ちつかれたんです。重歳さんが東洋経済を辞めて満鉄調査部に入ったのは14年ですが，ぼくはその1年後に石橋湛山と衝突して辞めたんです。そのいきさつは，前回は省略したので簡単に話しときましょう。

そのきっかけは重歳さんの京大の後輩で13年に入社した禰屋不二夫君が15年の夏に京城支局行の発令を拒否したからなんです。彼はその前に天津にいたことがあり，植民地が嫌で引き揚げてきたのに，また京城で，しかも仕事は記者の仕事というより庶務みたいなことが多いらしいんで断ったんです。ぼくら数人が彼によく聞いて，それから湛山に本人の希望を無視した配転はだめだと何回も交渉したんです。ところが湛山は社の命令に従わなければ辞めてもらうなどとワンマン的発言を繰り返し，結局話がこじれて禰屋君は辞表を出し，僕らもことの成行で連袂辞職ということになっちゃったんです。

細谷　そのとき一緒に辞めたのは。

杉本　細野武男，遊部久蔵，中野正などですよ。

細谷　錚錚たるメンバーだったですね。それで鈴木さんはそのときはもういなかったんですね。

杉本　そう。彼もいたら一緒に辞めてたろうね。鈴木さんにはぼくが世界経済調査会時代に上海へ資料の買い出しに行ったときお世話になってるんですよ。

細谷　ああ，それは前回にもありますね。それで鈴木さんはその後はどうなったんですか。

杉本　重歳さんは結局日本へ帰らなかったんです。それはね，河上会の会員の安田薫さんという人が河上会あてに手紙をくれまして，そのコピーをぼくがもらってはじめてわかったんだ。

安田さんていう人は京大経済の重歳さんの1年先輩で，満鉄調査部で同僚だった人です。それによると，重歳さんは北京大学の日本語の先生になって大学の構内に住んでいた。安田さんが昭和31年に訪ねたときは，芳子夫人はすでに亡くなっていて再婚した夫人を紹介されたそうです。その後も何度か訪ね，文化大革命で中断した後，51年に北京に行ったときはもう重歳さんは亡くなられていて，北京八宝山の中国革命志

士の墓地にある重蔵さんのお墓にお参りしてきたそうです。

細谷　重蔵さんていう人はなかなか偉い人だったんですね。それで先生，今日は前回聞きそこなった石橋さんの前の主幹の三浦鉄太郎さんの話をぜひ聞かせて下さい。

杉本　これが戦争中，昭和19年に三浦さんが書いた『世界転換史』ですよ。これ戦後，21年に東洋経済で出したが，この本は非売品の方だ。

程島　先生，三浦さんの追悼文集とか伝記はないんですか。

杉本　亡くなったとき『週刊東洋経済』で追悼小特集号は出た。それはぼくも持っている。これですよ。(『週刊東洋経済』昭和47年５月27号。高橋亀吉：三浦銕太郎翁を憶う。桜田武：三浦翁を憶う。松尾尊允：三浦翁を憶う　日本近代思想史の異彩三浦銕太郎）だけど独立の追悼文集っていうのはないんじゃないの。

程島　ああ，ここに草創期の東洋経済の幹部の写真が出てますね。

杉本　この天野為之は２代目の主幹，植松考昭（ひろあき）は３代目で，三浦さんは４代目の主幹なんだ。後で会長になった。

細谷　初代は。

杉本　町田忠治。それで面白いのは，この４人が全部早稲田の前身の東京専門学校出身なんだ。

細谷　へえ，そうですか。

杉本　大体ジャーナリズムは早稲田出身が多いんだけど。

細谷　すると三浦さんは大隈重信とか小野梓の影響を受けているんでしょうね。三浦さんていう人はただの経済ジャーナリストじゃあないですね。

杉本　うん，この『週刊東洋経済』で桜田さんが，三浦さんはトインビーみたいな独特の史観を持っていたといっているが，商大にいた同姓の三浦新七さんみたいな文明史家といってもいいね。

三浦さんとぼくはいろんな因縁がありまして，ぼくの父の兄貴が東京専門学校で三浦さんの同級生だった。渡辺治之助っていうんですが，養子に行ったんです，静岡の金谷の渡辺家に。昔は長男以外は全部養子に行くんです。父だけは東京の学校へ行っちゃったもんで，分家して杉本を名乗ったんです。

程島　長男じゃなかった。

杉本　三男です。それで三浦さんも養子なんだ。山下銕太郎っていうのが本名です。しかも隣村なんだ。ぼくの実家は吉永村にあるが，三浦さんはその隣村の相川村出身なんです。しかもぼくの伯父とずっと学校一緒だった。そして三浦さんの東京の住まいがまたぼくの馬込の家から歩いて２分ぐらいのところなんです。

細谷　へえ，それはまた面白いですね。

杉本　その関係があって伯父が田舎から出てきて家へ泊まるとよく三浦のところへ

行ってくるといって出かけていった。ぼくが東洋経済を志願することになったら，父が，じゃあ挨拶に行こうていうんで，父と一緒に三浦さんのところへ行ったんだ。

細谷　もう全然縁が深いんですね。

杉本　それで三浦さんが少しはぼくが入社するとき口を利いてくれたかどうか，それはわからない。けれど，とにかく普通の入社試験を受けたら入っちゃったんだ。

細谷　そのときはもう三浦さんは湛山に譲って引退してました？

杉本　大正14年にはもう譲っちゃった，割合早くから。欲のない人だから。それで後を高橋亀吉にしようか，石橋にしようかだいぶ迷ったらしいんだ。しかし，やっぱり東洋経済は日本の言論を指導しなくてはいけない，そのためにはパースペクティヴの広い人間のほうがいい，というんで湛山に決めたんでしょう。

細谷　石橋さんも早稲田ですね。

杉本　早稲田です。あの人は早稲田で哲学をやったんだ。先生は田中王堂ですよ。三浦さんはそれで湛山にしたんだ。

細谷　だから東洋経済ってのは全部早稲田。壮観ですね。

杉本　いわゆる街の経済学者も早稲田出身が多いですよ。東洋経済を出た高橋亀吉はもちろんですが，そのほかにも多くてみんな実証派というか，経験派ですね。ああいうのはイギリスの伝統でしょう。ロンドン・エコノミストとか『ロンバード・ストリート』を書いたウォルター・バジョットの影響を受けているんじゃないかな。それでぼくは入社してから，家も歩いて２分で近いから，ちょこちょこ三浦さんの家へ行って話を聞いたりしてたんです，そのころは。

細谷　じゃあ，先生は三浦さんの晩年ずうっと……。

杉本　うん。だから19年に行ったらこの本をくれたんだ。三浦さんはもうそのころは東洋経済を引退していた。東洋経済のビルは牛込の天神町にあったんです。それが昭和６年に日本橋のあすこへビルを建てて出てきた。その機会に２階までを東洋経済が使って，４階以上に経済倶楽部ってのをつくったんです。３階が食堂で，上が経済倶楽部の集会室だったんです。三浦さんはその経済倶楽部の理事長をやってた。

細谷　ああ，なるほど。

杉本　そうしていろんな人を集めては午餐会をやって，毎日講演をやるわけです。

細谷　えー，今でもやってますね。やっぱり当時，三浦さんは一流の実業家を全部知っていたから……。

杉本　三浦さんとは，そういう関係がありまして，ぼくらが記者になってから，毎日日常的な取材ばっかりやってちっとも勉強出きないってんで，少しみんな朝早く来て勉強しようじゃないかということになった。だけど場所がないので経済倶楽部の集会室が午前中空いているからそこを使わしてもらおうというんで，三浦さんに貸して

くださいって頼んだら，いいとも，勉強したまえというわけで，そこでみんな若手を集めて，例のバジョットの『ロンバード・ストリート』なんかを読んだんだ。

細谷　ウォルター・バジョットの古典。

杉本　あのころは，あんな本は神保町へ行けばたちまち集まったんです，古本で。宇野さんの岩波文庫の訳なんかまだ出てないころだ。それとかヒルファーディングの『金融資本論』を読んだりしたんですよ。それでぼくが東洋経済を辞めたときはもう三浦さんに相談する暇もなく，事後的に三浦さんのところへ挨拶に行ったら，「いやあ君，辞めたか」と，何か婉曲にやっぱり石橋のやり方が悪いようなことを言ってましたよ。

細谷　そうですか。

杉本　辞めた後も近いから三浦さんのところへ行っていた。そのころ三浦さんは，戦争がこうなっちゃうと，こりゃもう日本はいかん，何か書かなきゃあ，というんでやってました。

細谷　それがその19年の本ですか？

杉本　結局，こういう形で本になった。その前に三浦さんはポケットマネーを出してお礼をして，歴史の専門家を呼んで話を聞いたりしていた。例えば東洋史の三上次男さんなんか。

細谷　自宅へ？

杉本　ええ，自宅へ呼んでやってたんです。日本史は誰だったか，西洋史は誰だったかもう忘れたが，とにかくそれぞれ権威の人を呼んで話を聞いてました。結局その本が19年に出たわけです。序文には倶楽部で講演してもらったと書いていますけど，家にも招いてたんだ。非常にそういう視野の広い人で，単なる経済記者じゃなかった。

細谷　まったく抜群の人でしたね。

杉本　ところが非常に地味な人で，石橋みたいに派手じゃないから一般の人は知らないですよ。だけど経済倶楽部の古い人は三浦さんを慕ってやってくるわけです。三浦さんの話を聞きたいっていうので。この桜田武さんなんかもそうです。

細谷　東洋経済は石橋さんばっかり有名になっちゃって……。それで三浦さんの本というのはほかにもあるんですか。

杉本　こんな大きな本はこれだけでしょう。ほかに小さいものが何冊かあったはずです。（『新経済体制の理論と試案』昭和14年。『世界経済の転換』昭和24年。『米国の世界政策』昭和24年。『ソ連四十年』昭和35年）後は経済倶楽部で，黄色い表紙のパンフレットみたいな形で講演集っていうのをだいぶ出したんですが，あのなかにもあるはずです。

細谷　それは東洋経済にはありますよね。

杉本　東洋経済にはちゃんと保存してあるはず。ぼくももらってたけど，ああいうのはもう処分しちゃったんだろう，１冊も残ってないんだ。

細谷　東洋経済へ行ってそれ全部調べれば出てきますね。

杉本　ぼくなんかも，日産が例の満州重工やるとき，あれをぼくが担当して，あのパンフレットを書いた覚えがあるんだけど，それも残ってないんだ。

細谷　じゃあ，それも調べておきます。それで三浦さんの主幹時代に書いたものなんていうのは？

杉本　今，東洋経済で集めているらしいけれどよくわからないんです。大体，三浦さんは，さっきの追悼文で京大の松尾尊允もいってるように，明治時代，副主幹のときに『東洋時論』でときの政府の帝国主義に反対した論陣をはったんだ。それから大正に入って主幹になってから『東洋経済新報』で活躍したんだ。だから三浦さんの書いたものを集めれば立派な論集ができるぐらいあるよ。

細谷　それはぜひ東洋経済で出すべきですね。

杉本　湛山の論説が岩波文庫に入ってるでしょう。（石橋湛山『石橋湛山論説集』昭和59年）それなら三浦さんこそ入れるべきだよ。松尾さんがこのごろ三浦さんのことを急進的自由主義の立派な思想家としていろいろ方々に書いてるでしょう。だから松尾氏にぜひ三浦さんの論説を岩波文庫に入れてもらいたいね。大体，東洋経済には社史がないんだ。

細谷　『東洋経済新報言論六十年』（昭和40年）ていうのはありますね。

杉本　うん，あれはあれでなかなか面白い。初代から４代の主幹の回想録が全部入っている。だけれど，あれは社史じゃないよ。社史は20年ぐらい前から資料を集めてたんだ。それでぼくらに資料を提供してくれとか言ってたんだ。聞き書きもこういう，今，君たちがぼくに聞いてるようなことをやればいいんだ。そうしないとみんなどんどん死んじゃうんですよ。生き残りがだんだん少なくなる。

細谷　本当ですよ。

杉本　あの社史はどうなってんのかさっぱりわからないんだ。いつかちゃんと刷りもので呼びかけておいてその後の経過はなんとも言ってこない。

細谷　ぼく，今度言っときます。

杉本　今の社史の編集をやるってんで，戦前に営業か何かにいた人が，残って東洋経済にいるらしいんだけど……。

細谷　だいぶん以前にその方にお会いしたんです。最近じゃないですけど。

杉本　大原万平さんという人がいるんですけど，石橋湛山記念財団をつくったでしょう。あれの事務局か何かをまだしてるんです。それから石橋の全集をつくったときの責任者で山口正さんという人もいるはずです。

細谷　今度とにかく聞いてみましょう。ところで，先生は栂井義雄さんを直接にご存知でした？

杉本　もちろん，よく知ってました。13年の暮にぼくは彼と一緒に北陸を１週間位取材旅行したことがありますよ。

細谷　あっ，そんなに。栂井さんはたしか最後は出版局長ぐらいでお辞めになったはずなんです。

杉本　たしか常務取締役になった。栂井さんとほぼ同年の小熊孝さん，小熊さんは戦後早く死んじゃって。頭のはげた太った人だった。栂井さんも亡くなった。

細谷　小熊さんも栂井さんも大塚金之助先生のゼミなんです。栂井さんは大塚先生の妹さんと結婚したんです。

世界経済調査会時代

細谷　それではこれから世界経済調査会時代の話をうかがいましょう。

杉本　この前の座談会で世界経済調査会から資料収集に上海へ出張したという話をしましたが，このころの手帖が出てきたんだ，偶然。これを見ると上海へ行ったのは昭和16年９月15日から10月17日までです。

細谷　杉村広蔵先生の追憶文集（『杉村広蔵博士を憶う』杉村敦子　編集発行，昭和25年）によりますと，先生と一緒に行った方は２人ですね。蘆野弘さんと，浜田恒一さん。

杉本　そう，３人で行ったんです。蘆野さんは常務理事で資料収集はやらなかった。いろんな人に会っていたな。資料収集をやったのはぼくとそれから同じ研究員の浜田さんです。

細谷　それで先生，石原清子さんの話を…。

杉本　ああ，西雅雄夫人の。彼女は早稲田を出て三瓶孝子さんていう日本紡績史の研究をやった人と同級生です。はじめ聴講生だったらしい。昔，早稲田は女子を入れてくれなかったのかな。石原さんと三瓶さんの２人が聴講生だったんです。その後はよく知らないが，ぼくが東洋経済に入ったときはもう東洋経済にいたんだ。

細谷　あっ，東洋経済で記者やってたんですか。

杉本　統計部で小熊さんの下にいたんだ。

細谷　ああ，そうですか。

杉本　統計部にいて，そのうちにぼくらが辞めた後で辞めたのかな。それで上海にどういうわけで行ったのかな。

細谷　杉村さんの『追憶文集』に載っている西さんの話では，昭和16年の春，上海で西雅雄さんと一緒にいたとき，知人の千葉成夫という人に頼まれて旦那さんと一緒

に杉村さんに会ってますね。それで商工会議所に勤めることになったんですね。石原さんと西さんとは上海で知りあったんですかね。

杉本　いや前から知ってたんだろう。

細谷　西さん，そのときどこに勤めてたんですか。

杉本　要するに日本じゃ食えないし，雇ってもくれないから上海に行ったんだ。満鉄調査部に入ったんです。それで翌年17年の満鉄事件で捕まって獄中で死んだんだ。満鉄事件は，ぼくが留置場に入ってるときにおきた。それで彼女は未亡人になっちゃって引き揚げてきたんです。そして読売の出版局にいました。戦後ぼくも会ったら『読売年鑑』の編集をやってたんだ。それでぼくも何か経済学界の何とかいうのを『読売年鑑』に書かされましたよ。これもぼくは現物を持ってないから，自分が何年版に書いたかわからないんです。２年ぐらい書いたかな。清子さんは戦後に読売へ入ってから婦人問題専門家みたいになって，評論何かだいぶ書いたでしょう。本も何冊かあるはずです。

細谷　今でもお元気ですか。

杉本　元気でしょう。いつかぼくら東洋経済ＯＢが集まったとき彼女にも連絡したら，出てきました。もう彼女も80になるころじゃないかな。しかし，なかなかまだ若いんじゃない。

細谷　そりゃ大したもんです。

杉本　要するに社会運動家の仲間では相当評判な女性でした。

細谷　それから杉村先生の話を少し。

杉本　この『追憶文集』を見て思い出したが，ぼくもこれに書いてくれって頼まれたような気がするんだけど。

細谷　それはそうでしょう。だって世界経済調査会の人がたくさん書いてますもの。

杉本　何で書かなかったかな。ここに書いている人，竹中清之助君っていうのは，今ぼくの横浜商大にいるんだよ。杉村先生の敦子っていう娘さん，これが世界経済の資料室にいたんだ。彼女は津田か東京女子大を出たんだな。彼女は一人娘でしょう。この年譜を見ると，杉村さんは戦後，東京商大に戻ったんですね。「22年４月ゼミナール卒業生を主とするモナミ研究会を開始，月例とする」とあるが，ぼくもこれに入れられちゃったんだ，ゼミナールの卒業生じゃないけれど。

細谷　それはやっぱり上海の縁ですか。

杉本　「21年12月，世界経済調査会において研究員の研究指導補助にあたる。主なる研究項目は日本経済の半封建性，日本経済とブレトン・ウッヅ協定，ソ連の政治文化研究」とある。この縁なんだ。ぼくは何だか杉村さんに気に入られて，このモナミ研究会に出なさいって言われちゃった。

細谷　モナミって新宿にあった喫茶店ですか。

杉本　いや，それがね，戦後にできた東中野の北側にあったレストラン。

細谷　ありました，ありました。

杉本　あすこでやったんです。馬場啓之助とか山田長夫とかの東京商大の卒業生のなかにぼくも入れられちゃって，ぼくも何か報告させられた。

細谷　あ，そうですか。それで亡くなられたのは昭和25年ぐらいですか。

杉本　23年。

細谷　３年ですか，早かったですね。この人の先生は左右田先生ですね。

杉本　左右田さんですよ，もちろん。経済哲学なんだから。

菊川　杉村さんていえば，商大の白票事件ていうのはどういう事件なんですか。

細谷　あれはね，杉村先生が「経済社会の価値論的研究」という学位請求論文を大学に出したらその審査のときに白票が７票も出ちゃったんです。

菊川　いつごろですか。

細谷　昭和10年でぼくが予科２年生のときですよ。白票っていうのは普通は否の方へ入れて何でもないんですが，そのときは７票もあったから問題になっちゃった。それで結局教授と助教授が真二つにわかれ，教授のなかもまた割れて大騒動になり，学長の佐野善作さんでは収拾がつかなくなった。結局，山形から三浦新七さんを学長に頼んで来てもらって喧嘩両成敗という形でやっと解決した。当然杉村先生も解職。

杉本　このあいだ死んだ高垣寅次郎先生なんかは教授側だった。

細谷　あの先生が杉村先生の論文の審査委員で，もう１人は山内得立先生でした。当日は山内先生は病気で欠席，高垣先生が１人で報告したんです。

杉本　それで白票組だったの。

細谷　そうです。わたしのゼミの先生は高橋泰蔵先生で，高垣先生のお弟子さんだったんです。しかし，助教授だからそのときは先生と対立することになっちゃったんです。これはしかたないですね。

杉本　白票事件はねえ，10年９月ですよ。ぼくが学部２年のときだ。それで岩波がその博士論文を本（『経済哲学の基本問題』昭和10年）にして出したわけだ。博士が認められなかった本ていうんで。

細谷　本当にすごい大騒動でしたよ。ぼくはそのときは予科２年で小平のキャンパスにいましたけど。

杉本　それで，11年に商大助教授を辞めて，13年に上海商工会議所の理事になったんです。

細谷　それですぐ上海へ行ったんですね。だからあんな哲学者がそんなこと出きるかとみんなが思ったら，これが全然大したものなんですね。現実問題に対するセンス

も実に鋭い人なんです。

杉本　ぼくらが上海から帰ってから，17年1月に上海商工会議所理事を退職しちゃったんです。そして3月に世界経済調査会産業委員になって，それから貿易統制会の理事をやったんだ。それが交易営団に組織変えになった。

細谷　わたしが戦後，経済研究所に入って資料収集で交易営団に行ったら馬場啓之助先生もそこにいたんです。それはやっぱり杉村先生の関係ですね。

杉本　そうですよ，馬場さんは杉村先生の弟子だもの。

細谷　ああ，なるほど。

杉本　それで馬場さんと杉村さんはフィリピンにも行ってるんだよ。軍政部で顧問の村田省蔵さんに頼まれて東畑さんと一緒に。村田さんも東京商大の先輩でしょう。

細谷　へえー，それは知りませんでした。

杉本　東畑さんはマニラで杉村さんが連れてきた馬場さんを気に入っちゃったんだ。それで馬場さんは農業屋になっちゃったんだ。

細谷　一時，ちょっと。

杉本　それで戦後，農業総合研究所なんかへ行って所長になっちゃった。馬場啓さんはそれまで農業なんかやってないんです。本職は経済哲学なんだ。それから一橋に戻ったわけね。

細谷　大変な才能ですね。ちゃんとマスターしちゃうんですね。それで計量経済学なんかはじめるとまたすぐマスターしちゃうんですね。

杉本　彼は鵠沼に住んでます。

細谷　ああ，そうですか。

杉本　ちょうど彼が一橋の図書館長やってるとき，ぼくも図書館長だったから，国立大学図書館協議会の幹事を2人でやってた。

細谷　それじゃぁ先生はずいぶんおつきあいが深かったんですね。

杉本　ああ，館長会議のときなんか一緒にコンビでやったんですよ。それでまたちょっと前に戻りますが，ぼくは17年4月に治安維持法で捕まったんだ。起訴猶予だか留保だかどっちだか今わからないんです。書類が残ってないから。留保って方がきびしいのかな。とにかく4月から大森警察に8カ月入ってたんです。それから出てきたら体が参っているっていうんで，4カ月ぐらい経ったら，三宅さんが，どこかお前，温泉にでも行って体を休めてこいっていうんで，4月の27日から，このころの手帳が出てきたんで日取りがわかったんだけど，4月の27日から5月の3日まで伊豆の方へ行ったんです。まず静岡へ行ったんだ。なぜ静岡へ行ったかっていうと，ぼくらの仲間に健康だったら一緒に捕まる筈の山本鉞治っていうのが肺病で国の静岡へ帰って静養してたんです。これは静岡の醤油の醸造業の三男坊で，ぼくより1年年上なんです

けど，これは土屋喬雄先生のゼミですが，龍門社に勤めていた。そこをすぐ辞めて内閣調査局へ行き，それから企画院に行った。和田博雄さんの下にいて農業をやってた人です。それで16年ごろは東京農大の講師をしてました。ところが胸を悪くして東京農大も辞めて国へ帰って静養してたんです。

細谷　それは18年ですね。

杉本　18年です。その東京農大のとき教えた学生が川上正道。彼は東経大へ行って最近死んじゃった。それと法政の社会学部長なんかやった栢野さんとかいう人がいるじゃない。この人も地下鉄かどこかで心臓が悪くて死んじゃったんじゃないかな。東京農大で教えた弟子ですよ。それでぼくは静岡へ行って，捕まって調べられた内容なんかを彼にしゃべった。それからとって返して伊東へ行って，伊東で１泊して，三宅さんが紹介した谷津温泉，河津浜へ行ったんです。あすこに３日ぐらいいたかな。このときはもちろん世界経済に復帰していましたから，世界経済の仕事を持っていって頼まれた翻訳の原稿か何かの直しの作業をやったんだ。それから谷津から湯ケ島へ出て沼津へ行った。狩野川をわたった向こうの方でしたが，街はずれの松林の一軒家で古典社という古本屋をやっていた渡辺太郎のところへ行ったんです。そこで彼が出していた『図書週報』の欠けた号も補充してもらったりしたのかな。

細谷　渡辺太郎のことはまた後でうかがいます。

杉本　それからその足でまた清水へ廻って東京へ帰ったんです。だから27日から５月３日，小１週間あるな，これ。

社会科学辞典編集

菊川　それで先生は敗戦後，23年まで世界経済調査会に在職され，それから東大経済学部で社会科学辞典の編集をなさったんですが，この辞典の編集のころのことをもう少しくわしくうかがいたいんですけど。つまり，セリグマンの社会科学百科辞典や何かを全部バラしたんですか。

杉本　ああいう辞典の項目のタイトルと執筆者と行数を全部１項目ずつカードにした。ものすごい枚数なんです。それを東大の学生アルバイトを研究室に毎日呼んでやった。

菊川　何人ぐらいですか。

杉本　延べ何人になるかな，ちょっとわからない。そしてその監督をぼくがした。わからんことはぼくらが教えるわけです。

細谷　先生と学生のあいだにどなたかいらしたわけでしょう。

杉本　それは東大の助手がやった。

細谷　助手，誰ですか。

杉本　だから今はもう偉くなって，定年になったような人。経済学部じゃあ近経の大石泰彦とか館龍一郎。それから社研の助手連中，塩田庄兵衛とか，ああいう連中です。あのころ，23年ころはまだ特研生もいましたし，その連中のお小遣い稼ぎにもなった。

細谷　それで結構お金が出たんですね。

杉本　出たんです。日評から月に３万円位きたから。

細谷　当時の３万円ていうとたいしたもんだ。

杉本　編集室ははじめの１年は経済学部の名誉教授室，後の２年は図書館のなかの研究室，社研や新聞研が使ってた並びの部屋。その前は土屋先生が今出している『日本金融史資料』の編纂に使ってた部屋です。それは加藤俊彦君がやってたんだ。だから場所は加藤君からぼくは引き継いたんだ。大学の備品や何かあるでしょう，図書館のデスクなど。その部屋で２年やったんです。だからそのとき使った学生のうち，外務省の条約局長やって，官房長もやった伊達君ていうのが法学部の学生で，アルバイトでやってたんです。彼のおやじの宗雄という人がぼくのいた世界経済調査会の企画課長をしていた。この人は中山伊知郎と同期生です。その倅で，獅子文六の娘と一緒になった人だ。フランス語がうまくて。彼，伊達宗起っていうんだよ。

それでそのとき学生のカード採りの監督した連中は，大石，館，それから中川敬一郎君なんかもやったはずだ。ぼくがそのときの会計簿をつけてて，それがどっかにあるんですよ。誰にいくら払ったか，ぼくはそういう事務も，もう１人っきゃいないんだから，はじめは全部やってたんです。それから委員の先生には毎月手当を払った。

程島　編集委員の先生っていうのは。

杉本　大内先生が委員長で，舞出長五郎さんとか，矢内原忠雄さんとか，宇野弘蔵さんとか，山田盛太郎とか，それから法学部からは岡義武と，法律は川島武宜，そういう先生方ですよ。

程島　すごいメンバーですね。

杉本　その人たちをときどき集めて，今こういう状況ですとか何とかいってたんです。ただ，なかなかあの先生たちを全部一堂に集めるってのは大変です，同じ学内でも。

細谷　それにあのころは，東大もだんだん忙しくなってきたから。

杉本　だけど先生たちはそのときみんなダべるのが楽しいもんだから結構集った。

細谷　そういう仕事だからでしょうね。じゃあ，かなりそのときは楽しかったですね。それで結局，はじめたのは23年の５月でしょう。それで……。

杉本　はじめ２年間ぐらいは毎月約束どおりの金を日評はくれたけど，そのうち日評の金が出なくなっちゃったの。ところがはじめはぼくひとりでやったんだけど，前にも書いてあるように大井正君という，今は明大の政経の教授をしている哲学者です

が，彼が現われたんです。彼は東大の哲学ですが，東亜経済調査局にいて南方の民族学をやってたんです。例のウィーン学派の民族学です。シュミットとか，ほら岡さんていう人がいたでしょう，岡正雄。ああいう人たちがやってたエスノロジーです。それで彼に社会学とか，哲学から文化人類学とかああいう項目の選択を頼んだ。

そのうちもう1人，土屋保男君というのが山形から現われた。この土屋君とはもう今でもくされ縁になっちゃってんだけど。この大井君もこれ山形の鶴岡の人なんです。それで土屋君と大井君が山形で民科の支部をやってたらしいんです。そのうちレッド・パージが吹き荒れて，土屋君は，山形新聞をクビになっちゃったんだ。はじめ手紙がきて東京に何か職がないかって。けれど，今の東京では食べ物がなくてとてもだめだからまだ出てくるなって言ったのに出てきちゃったんです。それで何とか食わせようっていうことになって日評に話した。日評はその前に大井君が来たから大井君を雇ったでしょう。それは大井君が都立高校で日評の鈴木三男吉常務と仲間なんです。それから，その年代の松村一人とか寺沢恒信とか法政の湯川和夫とかがやってきた。そのために辞典編集室で日本哲学会の旗揚げをやっちゃったんだ。勝手に哲学会の住所を東大の図書館に断らないでここにしちゃった。

程島 そうですか，古在先生もそのころ……。

杉本 そう，辞典の編集室が若い哲学者の巣みたいになっていた。そのうち日評から金が出なくなっちゃってそれで困っちゃったんです。

細谷 お金が出なくなっても編集はつづけてたわけですか。

杉本 ええ，それで日評から金がこないから3人で食わなきゃいかんていうんで，今度は外の出版社の辞典の下請けをやったわけです。

細谷 それは最初は平凡社。

杉本 いや違う。社会科に関する辞典です。名前はちょっと忘れた，出版社は。たしか今の日大のそばにある，三崎町の通りから入ったところにある中教出版っていうの。中教出版のその社会科教科書が偏向教科書で有名になった出版社です。高島善哉さんがやった。その下請けは長洲一二とか日高六郎がやったんです。

細谷 岩崎書店の『政治経済大辞典』っていうのは。

杉本 あれは豊田四郎君が戦後，日本経済機構研究所をつくった，そこの仕事です。岩崎も金を出したんだ。そのとき豊田君の下にいたのが浅田光輝と今専修にいる経営学の中村秀一郎なんだ。中村君はそのころは学生ですよ。ぼくらのところに原稿を取りに来たのは中村君でしたか。ほかに機構研究所の名前でいろいろ本出したでしょう。『大塚史学批判』とか，『日本資本主義の実態』とか。大体，豊田君は岩崎と青木で本を出していたんです。

菊川 先生，その東大の社会科学辞典の話ですが，これの原稿はどうなっちゃった

んですか？

杉本　原稿って，まだ執筆依頼するまでにはなってないんだ。カードしかつくらなかった。だから，どういう辞典からカードを採ったかっていうのは，ぼくはそういうノートをつくってつけてましたから今でもわかりますよ。

細谷　カードはどこへ行っちゃったんですか？

杉本　そのカードは大月書店が後をやるから貸してくれとか言って持ってった。そのカードを収納するためのカード箱がないから，こういう平らな函をつくって仕切りをして，それにずらっとはめて，その函がいくつもあったんです。

細谷　それは，何万て数でしょう。これは財産ですね。

杉本　それを東大の部室を引き揚げるときに置き場所がないから世界経済調査会の資料室に預けたんです。ぼくの家には持ってこれないんです。そんな15坪の家には入らないから。それであそこに移動したんです。

細谷　世界経済調査会が一時いた都留さんのお父さんの邸宅ですか，上北沢の。

杉本　いや違う。調査会はそのころは大手町のオフィスへ引き揚げたんです。それを大月が預っていったんです。大月はそれを種に『社会科学辞典』をやるはずで，さっき言った土屋君をぼくが相談して呼ぼうとしたんです。ところが彼はその前にぼくが平凡社の『経済学事典』をやってるときに採ってもらって平凡社にいたんだが，いろんな事情で辞められなかった。その代りに河出書房にいた，あの有名なベテランの編集者の田辺という人を河出の経営がおかしくなっちゃったんで，河出から大月へ来てもらったんです。それで，『社会科学辞典』の準備をはじめたんです。しかし，この件も中止になった。

程島　それでカードはその後……。

杉本　で結局カードはそのままになっちゃった。それでぼくも時々，あれどうしたって聞くと，どっかあっちの東上線の方に倉庫があるらしいんだ，その倉庫にあるんじゃないかな。

程島　倉庫があればまだあるんじゃないでしょうか。

杉本　一度そこへ行ってみようと思ってんです，調べに。

細谷　それこそとり戻した方がいいと思いますよ。

杉本　そのカードを元に分野別に項目表なんかつくって，それの全部のリストをガリ版か何かでつくったんです。

菊川　それは先生の所にないんですか。

杉本　それも全部そっちへ預けちゃったもんでぼくの手許にないんです。編集日誌的なものとその会計帳簿以外はないんです。

菊川　もったいないですね，そんな大財産を。

杉本　今だってまあ基本的なものは使えると思うんです。

細谷　十分使えますよ。

菊川　あの，早く先生，確認なさっておかれませんと，本当にあれですよ，もう……。

程島　そのうちクズ屋にでも行ったらえらいことですね。

杉本　そうなんですよ。時間が経つとわかんなくなっちゃうからな。

細谷　もう先生，今年はおやりになったらどうでしょうか。

杉本　もう30何年前だからね。

細谷　例の山田秀雄さんの『社会科学年表』のカードは，水田洋さんのところに行ってるんです。

杉本　行ってるって，保管してあるの，

細谷　はい全部，あれも尨大なカードです。

菊川　どこまで出きてるんですか。

細谷　いえ，第1巻だけ同文館から出版されてるんです。

菊川　1巻だけで。

細谷　ええ，全4巻のうち最初の1巻だけが本になったでしょう。2，3，4巻がカードで寝てるわけです。

杉本　もっとも水田君，数年前にあの一部分みたいの出したでしょう。

細谷　ええ，名古屋の雑誌にスコットランド啓蒙学派の年表（水田洋「スコットランド研究のための書誌――とくにその啓蒙思想について――」『調査と資料』第73号，昭和56年3月。水田洋「スコットランド研究のための書誌（続）――とくにその啓蒙思想について――」『調査と資料』第74号，昭和57年3月）を出したんです。

杉本　うん，あれ別本みたいにして崇文荘なんかで依託販売してますよ。

細谷　あれっ。

杉本　なんとか年表っていうの。

細谷　それは知らなかった。じゃあそれはそれで買いましょう。ぼくは水田さんから雑誌に出した方はもらったんですけど。あれは山秀さんがもうやらないっていうんで，水田さんがカードを全部預って，何ていうか簡略版をつくるっていうんで，また文部省の科学研究費をもらって，みんなを集めてやってるんです。まえがきに書いてありますよ。

3　東海大学・横浜国立大学時代

菊川　それではこれから東海大学時代へ入りましょう。

杉本　ぼくの手帖を見たら，戦後23年の4月30日，世界経済の非常勤研究員になっ

ている。前回はただ春になっていたでしょう。

細谷 待って下さい，23年に東大の経済学の辞典の主任になってますね。

杉本 そう，4月30日までは世界経済の専任でいたんで，すぐ辞めちゃあ困る，1週間に1，2回顔出してくれっていうんで4月30日に非常勤研究員になったんです。それから5月1日付で東大経済学部研究室内社会科学辞典編集委員会主任。それで同時に日本評論社嘱託です。あそこの出版企画とか『経済評論』の編集について会議に出てくれとか言われて，日評が2千円だか3千円だかくれたんだ。この編集主任の給料っていうのも日評から編集費が月何万円かくるとそのうち1万円ぼくはもらってたんです。それじゃああまりに安いっていうんで，日評嘱託で2千円だか3千円だかくれたんだ。それから1年経って，東海大学経文学部の教授になった。前回は文経といったが，これは間違いで，経文学部教授なんだ。これもこのあいだ文部省設置委員会へ出した書類が出てきて，それ見たら経文学部でした。これは旧制です。だから教員としてはここが専任教授という形になったんだ。ですからこれは通いですよ，もちろん。辞典の編集しながら通ってたわけだ。それから日評がそのうち経営が悪くなって，この辞典の仕事がつづけられなくなって26年3月限り，辞典編集委員会は解散したんです。だけど日評の嘱託はそのまま。それから，この同じ4月に大森の馬込からこの片瀬海岸へ引っ越してきたんです。

それで辞典が解散になったんで，辞典関係の資料をまとめて持ってきて，世界経済の資料室のなかへデスクをつくっちゃった。そのとき名和献三君を兄貴の統一さんに頼まれて世界経済に雇ったわけです。彼は黄土社っていう出版社にいたんだ。あれ小森がやっていた――小森，あの美濃部さんの担ぎ役になった，小森武がやっていた出版社ですよ。彼は上海引き揚げなんです，あの連中は上海の『東亜日報』という新聞にいたんだ。高橋正雄もあそこです。高橋正雄も労農派事件でやられた。留学から帰ってきて横浜の港へ上陸したら捕まっちゃったんだ。それで戦争中は上海へ行って『東亜日報』にいたんです。名和献三君も関西学院の英文科を出て，そこに勤めていて引き揚げて来て，献三君とぼくが大阪商大の経済研究所がつくった産業経済研究会の資料収集役になったんです。世界経済へ集めて，それを大阪へ送っていたんです。そんなことをやってるうちに，横浜国大が定員が空いていると行政整理で削られちゃうから，何でもかんでも来てくれと，長洲君が使いになってやって来て，早く承諾してくれと言われた。ただ東海大学にいたころ，静大からも来てくれって話もあったんです。人文学部ですが，その話はこのあいだしないと思うんだ。

細谷 ええ，ないです。

杉本 それで静岡っていうのはぼくの両親もあっちの出身でしょう。おふくろは清水ですが，また東海大学の理事を鈴与の弟がやってたんです，地元の有力者として。

そんな関係もあって，それで東海大学を助けてやろうって決めたんです。そのうち静大からも言ってきたんです。じゃあ，もう静岡に引っ込んじゃおうかなとちょっと思ったこともあるんです。だけどここに家を建てちゃったし，またこれを処分して静岡に行くのも何だし，ちょうど横浜国大から言ってきたから，もう神奈川県民になったんだし，地元にサービスすべきだっていうようなことで，静岡を断って国大に決めちゃったんです。そこで東海大学を辞めたんです。

それで26年11月16日付で助教授になったんだけど，学年の途中だから授業をやらなくてよかった。そうしたら当時の学部長の徳増さんから図書資料を整備してくれっていわれちゃった。徳増さんとはその前，本郷の原広書店で一緒になったことがあって，顔なじみだったんです。お前は図書の方に通じているからやってくれって言われて，半年，授業のない期間にその基礎をつくったら，それがずうっと尾を引いて，そういう面倒を定年になるまでやることになっちゃったんです。それから32年に教授になった。そのころ東大の社会科学研究所で１年間非常勤研究員っていうのをやりました。履歴書を見たら出てきた。

細谷　社研ですか？

杉本　そう。これは何でかというと，あのころ社研の教授には１人ずつ非常勤研究員を雇う割当があった。だから宇高基輔がぼくに社研の資料室の面倒を見ろっていうことだったんだ。２千円だか３千円くれたんです。１年間毎月，社研に１週間に１回遊びに行ったようなもんです。

細谷　宇高先生って横浜から行ったんですか。

杉本　いや宇高君は六高から来たんだ。彼は東亜研究所にいて戦争中岡山に引き揚げちゃったんだ。彼は和気清磨呂の和気の男です。三高出身で東大卒なんです。それで旧制六高の法制経済の先生になったんだ。それが戦後，岡山大学になって，それから社研に来たんです。ぼくが辞典をやってたとき，宇野さんなんかがソヴィエトやる人を探していて，宇高君に白羽の矢が立った。それでぼくのところへ宇野さんや遠藤湘吉がやってきて，宇高君ってどういう人かなんて聞いてきました。ぼくが辞典をやってる最中，宇高は24年か５年ころ社研に来たんです。その宇高がぼくを自分の割当の非常勤研究員にしたんです。学部でいえば非常勤講師です。

細谷　多分あれですね，東大社研が経済資料協議会に入ったってのは，宇高先生の世話ですね。

杉本　東大社研が入ったのは彼が図書委員でもしてたころかな。

細谷　そのころ私は宇高先生に会いましたよ。

杉本　いつ入ったの，東大社研は？

細谷　経済資料協議会の30年史ですが，ここにありますよ。

杉本　東大社研は早いんじゃない。ああ，26年1月にはもう入ってるよ。スターティング・メンバーだよ。それで話をまた戻すと，39年には国大の図書館の分館長，翌年，附属図書館長になったんだ。

館長をやってるとき文部省の図書館視察委員という予算がついて，それをやったんです。それから40年，学部長事務代理っていうのを2カ月ばかりやった。これは何かっていうと，長洲君が学部長をやっていて，彼がソヴィエトかどこかへ行っちゃって，その留守番をぼくがやらされたんだ。このころ何をやったかというと，例の学術総合文献目録をやり直すっていうんで，文部省の学術奨励審議会っていう組織か何かあって，そこの分科会に狩り出されたんです。図書館視察委員はまたもう1回位やらされているんだな。それからいよいよ44年が紛争です。このときは42年6月に評議員になってたからひどい目に会った。

細谷　学部長事務代理っていうのをまたやってますね。

杉本　このときは宮崎義一君が学部長だったんだ。彼がダウンしちゃって，1月ばかり事務代理をやった。それで正式の学部長をやったら，もう胃の具合が悪くなって築地のがんセンター病院に入っちゃった。だから学部長は実質的には2カ月しかやってないんです。ここで3カ月近く入院して，少し痛みが納まったんで出てきた。なぜかっていうと3カ月以上入院してると休職になっちゃうていうんで，事務長が出てこい出てこいって言うわけです。それから6年ばかり評議員なんかも辞めさせてもらっていたんですが，6年間経ったらとうとうまた痛くなったんです。それで50年の夏休みに赤坂病院へ入って胃を切った。そしたら翌年またこのヘルニアになってやり直し。それから後3年じいっとしてて定年になったというわけです。

菊川　赤坂に入院なさってからもう10年…。

杉本　10年経ってます。

4　著　　作

細谷　それではこれから先生の著作の話をうかがいましょうか。

杉本　まあ，ぼくは翻訳ばかりやってるんでろくなものはないんだ。これ，白いのは，中野正剛の雑誌の『東大陸』で，これにぼくは2つ書いてるんだ。（松本市郎「支那農業の南北型」『東大陸』第18巻第6号，昭和15年6月1日；小泉勇「大陸インフレーションの現状と影響」『東大陸』第18巻第9号，昭和15年9月1日）。なぜこんな雑誌に書いたかっていうと，遊部久蔵君がここにペンネームで書いているんだ。それは遊部君の友達がこの編集部にいたからなんです。だから遊部君が，阿久津稟というペンネームでインフレーションのことを書いた。この松本市郎と小泉勇というの

はぼくのペンネームです。速水世紀夫の「金はどうなるか」，これは遊部君です。遊部君は２つ書いてるんだ。それからこの満鉄の『資料彙報』に一つ翻訳がある。これは名前がちゃんと出てます。（杉本俊朗訳「1937年以来の華北物価，」『満鉄資料彙報』，昭和15年６月）こんなのはぼく以外は知らないだろう，満鉄の雑誌だから。それからぼくが東洋経済で世話になった三宅さんについてはこういうものが出てるんです。『三宅晴暉の足跡』（発行　三宅千里　三宅鴻　昭和43年）千里というのが奥さんで鴻っていうのが息子です。この息子は英語学者で成蹊大学の教授か何かしてますよ。これには財界人がだいぶ書いてるでしょう。大内兵衛は告別式のときの弔辞が載っている。石橋以下，東洋経済関係者と大原社研の関係者も書いている。三宅さんは大原の理事をやってましたから。要するに戦争中，大原が金に困ったときに，鮎川義介に話をして鮎川の義済会の金を引っ張り出して大原を助けたのが三宅さんなんだ。東宝の取締役をやったり，NHK にも関係したんだな。小汀利得とか室伏高信，細田民樹，三鬼陽之助なんていう人も書いている。「三宅晴暉のエッセイ抄」なんていうのも入ってるな。それからこれは前回にもちょっと出た『新生』っていう雑誌。

細谷　青山虎之助の。

杉本　そう，虎之助の。あの雑誌はいったんつぶれてまた復刊した。それで三宅さんが亡くなったとき「三宅晴暉先生の思い出」っていう特集号をつくった。さっきの『足跡』にはこの特集号に載った寄稿は全部入ってるんだ。

細谷　それ何年ですか。

杉本　41年に１巻からまた出してるんです。この「思い出」は第１巻８号，41年11月号なんだ。

細谷　先生が21年に『新生』の２巻３号にお書きになった「財産税と金融資本と日銀」はないんですか。

杉本　いや，あれね。近代文学館がリプリントしてくれて送ってきた。現物はぼくはなくしちゃったんだ。

細谷　ああそうですか。この雑誌が出たときはすごかったですね。

杉本　あの敗戦のすぐ後には何にもないからよく売れましてね。

細谷　大変なもんでしたよ。ブームでした。

杉本　それから，この『グラフィック』っていう雑誌，これ知ってる？　これは西園寺公一がやっていたやつなんです。まあ『朝日グラフ』を進歩的にしたようなもんです。ここにぼくは学校を出て翌年はじめて一つ書いたんだ，北村三郎というペンネームで。これ（「尨大予算・公債・節約・貯蓄」第３巻第８号，昭和13年４月15日）が残ってたんだ。こんなのはぼくが死んじゃったら誰が書いたかわからないでしょう。この『日本国際年鑑』っていう，こんな年鑑知ってますか，戦前に出てた。発行人は

越寿雄っていう人で，これに金を出したのは西園寺公一です。

菊川　はあ，創美社っていうんですね。

杉本　うん，たしかこれ，例の写真家の名取洋之助が関係してたんです。西園寺公一も死んだんでしょう。ああいう名門の出の人だけど，彼の事績を書いた本とか伝記なんていうのは，いろんなことやったんだから出てもいいと思うんだけど。

菊川　何か出なかったですか。

細谷　西園寺さんは，北京時代のことを書いた本はいろいろありますね。それから西園寺さんのことを書いた記事も時々ありますけど，まとまった伝記なんかはないんじゃないでしょうか。それで先生，何で『グラフィック』に書いたんですか。

杉本　それは菱山辰一っていう読売の記者が家の近所にいたんです。この人はフランス文学者で詩人の菱山修三の兄貴です。菱山修三って言ってもみんなもう知らないだろうな，若いときに死んだから。外語の仏文出です。家の近くでぼくがよく行く大森の東湖堂という古本屋のお得意だったんだ。古本屋のおやじが菱山さんのところへ遊びに行こうって，一緒に行って，それで兄の辰一と知り合いになったんです。菱山が『グラフィック』の常連だから，彼がぼくに何か書けといって，そんないきさつで『グラフィック』に書くことにしたんです。菱山の妻君というのは，松川七郎の夫人と女学校のときの同級生なんだ。そういう縁もあって，菱山って人は戦後も読売にいたんですが，読売を辞めて産経新聞に行った。そのとき三宅さんが産経の論説委員になったんだ。その関係もあって，戦後も彼とつきあった。もう引退して八王子にいるらしいんだけど。有名な経済記者ですよ。

細谷　それから東京市の雑誌にいろいろ書きましたでしょう。

杉本　これが困っちゃうんだ。今度，家のなかを掃除したら『東京の貿易』っていうのだけ出てきたんだ。これです。これは安藤三郎っていうペンネームです（安藤三郎「中国海関貿易統計の修正について」『東京の貿易』第3巻第22号，昭和15年11月15日)。

細谷　これは先生，大作じゃないですか，こんなにたくさん書いて。

杉本　まあ，この計算みたいなことをやってんです。

細谷　すごいですよ。こういうもの，このころにはまだたくさんあるんでしょう。

杉本　何かこれ東洋経済の『統計月報』に一度書いたもんです。

細谷　それを書き直して…。そのほかにも東洋経済の雑誌に書いたものが何十ってあるんでしょう。それはその前後の雑誌を全部見ればわかりますか。

杉本　それはわかるよ。この『東京の貿易』にはもっと書いたかどうか記憶ないが。もう一つ『東京市産業時報』というのがあるんです。それに何か中小企業問題を書いた記憶があるんです。ああいう雑誌は古い大学に行けばあるんでしょう。

細谷　市政調査会にあります。

杉本　市政調査会か，ああいうところに行けばあるんだね。

細谷　東京商工会議所の図書館にもあるでしょうね。

菊川　お名前は先生，全部ペンネームでございますか。

杉本　もちろんそうです。戦争中は大抵ペンネームです。

細谷　それも『図書評論』のものと同じ名前じゃないんですね。

杉本　まあそのつど違うんだ。

菊川　まず先生，自分のペンネームを全部書いてくださらなきゃあぼくらは探せませんよ。

杉本　自分だって現物を見なきゃわからないよ。

細谷　絶望的だな，こりゃ。

菊川　どうもイタチゴッコみたいですね。

細谷　だからこれは結局，雑誌のあるところをぼくらが探して，この雑誌はここにありますよって言って先生をつれていくよりしょうがない。

杉本　何を書いたか思い出さなきゃならない。雑誌のタイトルだけは大体見当がつくんだ。

これももう一つ。こりゃあまあ翻訳ですけど，16年ごろ渡辺経済研究所の仕事を少ししてるんだな。渡辺鉄蔵は三宅さんの友達で，三宅さんに頼まれたんだ。

菊川　どんなものですか。

杉本　ワーゲマンの研究所の“Wochenbericht”という週報みたいなものをいくつか訳した。これですよ。（伯林景気研究所『大戦の中南米貿易に及ぼせる影響』昭和16年9月。ニコラス・カルドア『英国の戦時財政と国民所得』昭和17年3月。ガンサー・スタイン『支那奥地の物価問題』昭和16年11月“Pacific Affairs”所収）。渡辺鉄蔵っていう人は昔東大の助教授までやった人です。工業政策か何かやっていた。まあ，いろんなことした人だけど，商工会議所の理事もやったりした。このころは渡辺経済研究所っていうのを市政会館のなかにつくって，何かやってたんですね。それでこんな物をつくって会員に配ってたんでしょう。企業や何かを会員にしてたんじゃないかな。

細谷　三宅さんの仕事って多いですね。

杉本　まあ一種の親分だったから。

細谷　みんなに分けたんですね。

杉本　そう，栂井さんなんか三宅さんの代筆を大いにやってその原稿料をみんな飲んじゃったんだ。それで三宅さんていう人は，みんな若い者を集めてご馳走するのが大好きなの。だから帝国ホテルだとか例のプルニエなんてあったでしょう。ああいう

ところへぼくらが若いころ出入りできたのはみんな三宅さんのおごりなんだ。

細谷　それはお金持ちでないと出きませんよ。

杉本　だから彼はどっかへ行って仕事を頼まれてくると，そういう金をみんなに大盤ぶるまいするのが好きだったんです。自分はあんまり酒飲めないんです。

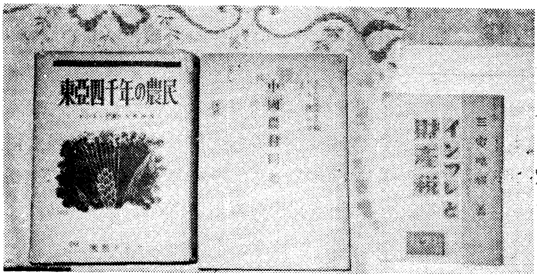
細谷　それで酒飲ませるんだったら大したもんだ。

杉本　そういう親分的なとこがあった。

細谷　先生，また著作に戻りましょう。

杉本　まあ，こまかいものはこれぐらいにして昭和15年，東洋経済にいたころ『中国農村問題』（太平洋問題調査会編）っていうのを翻訳して岩波から出してるんです。

それから19年に『東亜四千年の農民』，ていうのを栗田書店から出した。これは何かっていうと，キングの翻訳ですが，何でこんなことをやったかっていうと，ぼくが東洋経済を辞めたとき，遊部久蔵君も一緒に辞めたんです。このときぼくは日本経済連盟に就職するまで2カ月近くブランクがあるでしょう。このあいだブラブラしてた。遊部君の慶応の友人が豊田四郎君なんです。豊田君は当時慶応の助手をしてたんだ。遊部君に豊田君を紹介され，研究会をやろうってことになって，豊田君の家へ集まったんです。それでリチャード・ジョーンズの『地代論』を一緒に分担翻訳しようってことになって少しやりはじめたんです。そのうち遊部君は東亜研究所に就職した。豊田君は当時藤林敬三さんの助手なんかしていて技術論をやってたんです。そうしたらこの『東亜四千年の農民』っていうのは東亜の農業技術のことをよく書いてあるんです，視察記ですけど。それで技術論なもんで，あれをどうしても訳す必要があるって豊田君が言い出して，自分のゼミの学生に分担して訳させた。ところがどうにもしょうがない訳が出き上ったから，これを直してくれって彼に頼まれたんです。



その改訳をぼくは16，17年にかけてやってた。そして校正が出た最中にぼくが捕まっちゃったんです。そのために出版はずっと遅れて19年に栗田書店からやっと出すことが出きたんだ。著者のキングという人はアメリカの農学者ですけれど，東畑精一さんが若いころウィスコンシン大学に留学したとき，キングはそこにいた人なんで，東畑さんとそのころつきあいが出きたんです。それでこのキングの翻訳についていろい

ろ東畑先生に教えてもらったりしたんです。だから原訳はぼくじゃないんですけど，全面的に直しちゃったようなもんです。このとき石黒忠篤さんに会ったら，石黒さんも若いときキングと接触しているから，いろいろ話が出て，アーサー・ヤングの昔のエブリマン叢書で出た農村紀行をもらったな。

その後は23年2月か，ヘンリー・ソーントンの『紙券信用論』。これは金融の本です。これは留置場から出てきてやったんです。この本がなぜ渡辺佐平先生との共訳になったかっていういきさつがあるんです。

細谷　全然この前には聞かなかったんです。

杉本　これは日本の出版社の編集部がいかにオソマツかっていう話なんですが。これもちょっと話が長くなるけど。実業之日本社が戦争中に経済学振興会っていう財団を創立何10周年記念でつくった。高橋誠一郎とか久保田明光とか，岸本誠二郎というような人が委員でした。そこで採算が取れない経済学の古典の翻訳をやろうということになった。そのときに荒木光太郎のゼミの卒業生が実業之日本の二代目社長だった。それで荒木さんが振興会の事務局長みたいなことやってた。荒木さんは世界経済の客員もしてたんです。それでぼくらに何かやらないかと話を持ってきた。ぼくはソーントンの原本を入手していて，これをやりたいと思ってたんで，じゃあ，やりましょうといった。それで印税だか前金みたいなのを振興会がポンとくれたんです。

それで翻訳をやってたら戦争がああなっちゃって，なかなか出せなくなった。だから実業之日本でこれを出すことに決まっていたのに，戦後になって渡辺佐平さんがぼくとは別に自分で訳して，これを実業之日本がまた引き受けちゃったらしいんだな，自分のところでぼくに頼んでいるのがわかっているのに。人が代わっちゃったかどうか知らないけれど。だからぼくが原稿を持ってったら向こうがびっくりしちゃったんだ。それで岸本誠二郎さんが仲にはいってくれた。岸本さんはぼくの妹の仲人だし，佐平さんはぼくも戦争中から知ってたんで，じゃあ，ぼくの訳と渡辺さんの訳と一緒にして共訳にしようってことになったといういきさつなんです。

細谷　岸本先生がいなかったらどういうことになっちゃったか。その経済学振興会は経済学の古典の翻訳がいくつかありますね。

杉本　出しましたよ。ハロッドの『国際貿易論』の藤井茂さんの訳とか，ハイエクの『資本の純粋理論』とか，リストの『貨幣信用学説史』とか，5，6点は出したんです。戦後はインフレでその基金もなくなっちゃったんだか何だか。

その後，戦後になって21年にスノーの『中国の赤い星』，これ上巻だけですけど宇佐美と共訳して同友社から出した。これはどういういきさつでこんなものやり出したかっていうと，この同友社っていうのは，要するに今の経団連の副会長の花村さんがかんでるんです。花村さんていう人は山口高校出身で，山口高校の同級生に戦争中金

をもうけた永美という人がいたんです。それで彼が金出すから出版やろうってことになった。花村さんが経団連のカオで三菱何号館に，三菱地所からオフィスを借りてそこではじめたんだ。そうしたら花村さんがスノウの本は売れそうだからって言って……。花村さんは大内ゼミなんです。あの人は大内さんの書生みたいなことやってた人なんです。それでぼくにやってくれって頼みに来たんです。本もぼくは読んでた。これたしか世界経済調査会のために上海で買ってきたのかな。ぼくはこれ戦争中に読んでいたんです。そんな話をしたんだな，そうしたらお前やれっていうことになっちゃった。それで宇佐美を誘ってこれをはじめたんです。上巻をまず出した。そのうちこの同友社が永美っていう出資者の名前に変わって永美書房になったんです。同友社のときに大内さんの昔の本なんか出したですよ。（大内兵衛『現代イギリスの政治過程』大正14年）それと猪俣津南雄のインフレーションの本（『貨幣・信用及びインフレーションの理論』　同友社　昭和23年）をぼくがあとがきを書いて出したりしました。

細谷　その下巻はその後出ましたか？

杉本　下巻はぼくが忙しくなってやらなくて，後を全部宇佐美がやった。そのうちこの永美書房がつぶれちゃったんで，筑摩書房から１冊本で出したんだ。それが昭和27年ですよ。上巻の「あとがき」を見ると，そのとき下巻の宇佐美訳は校了までいってたんですよ。ところが GHQ に検閲で引っかかって下巻は出なかったんだな。この上巻は当時珍しいから相当売れたんじゃないかな。

それから辞典をやっていたころ，『マルクス金融論』（カール・マルクス『マルクス金融論１』経済学研究会訳，青木書店，昭和24年)っていうのを青木で出したんだ。この本も家にあるはずなんだけど，現物が見当たらないんです。これは『資本論』のなかの信用論のところを高畠訳が使いものにならないっていうんで自分たちのためのテキストとして１章ごとにぼくらの戦前の仲間で訳し直したんです。これも結局，上巻しか出なかった。

細谷　ああ，そうですか。

杉本　でもこの訳はいいって，当時はその道の人からは好評だったんです。

細谷　共訳者はどなた？

杉本　これはぼくらの仲間の宇佐美，神野璋一郎とか上杉正一郎，三宅義夫，山本二三丸，安藤次郎。神野君は和歌山大学の学長なんかやった。今，福山大学かなんかにいる，彼ですよ。立教にいたんだ，当時。

それと安藤次郎は上海にいて，さっきの杉村広蔵さんの追悼文集に書いてますね。安藤君は中西功やなんかと一緒に上海で捕まって，戦後東京へ護送されて，終戦後10月ごろ出てきたんです。それで出版印刷の労組の書記長なんかやった。それから彼は

中国語も出きるんで，金沢大学へ行って統計学の先生になったんだ。彼は有沢ゼミで，ぼくより１年上なんです。岡崎次郎さんなんかと東亜経済調査局にいたんだ。それから満鉄上海事務所へ行ったんだ。それから英米租界の行政組織の工部局に移ったんです。

程島　それで先生の著作は次は。

杉本　翻訳ばっかりなんですが，横浜国大へ行く直前に『マルクス・エンゲルス選集』補巻の３の『経済学批判』を訳してるんです，26年か。『マル・エン選集』の大月書店の末期の本です。そのあいだには『マル・エン選集』の校閲や何かをやりましたけど。

菊川　そうすると国民文庫に入ったのは。

杉本　もっと後です。これをもとにして改訳したんです。それから27年７月から29年６月まで平凡社の『経済学事典』の編集を頼まれて２年ばかり平凡社通いです。これの編集委員は名目的だけど，脇村さんと青山秀夫と，後誰だったかな。

これと並行して丸山真男の『政治学事典』が進んでた。『哲学事典』もやってたんです。大百科事典をやる前に各分野で１冊本のかなりデカイのをつくるっていうんでやったんです。『政治学事典』は丸山さんと中村哲さんと辻清明の３人の名前だけど，実際やったのは松下圭一なんです。松下はあのとき大学院生か何かで，たしか平凡社の嘱託になってたんだな。それと一緒に今，新評論の社長をやってる二瓶（一郎）がこの平凡社にいたんです。二瓶は『政治学事典』をやった。ぼくは『経済学事典』をやって，土屋保男君をここに世話してこれを担当してもらったんです。そうしてこの日付を見ると全く偶然なんだけど，ちょうどその翌月に今度は岩波が経済学の小辞典をはじめるから手伝ってくれって頼まれた。

細谷　これは29年からですか。

杉本　うん，そうなんです。それで岩波のは今まで延々とつづいているんです，いろいろ形を変えて。また今度改訂してくれって…。

細谷　あれは先生，都留さんから頼まれたんですか。

杉本　そうです。都留さんが岩波から頼まれて，横山正彦，宮崎義一とかを動員したんですが，ぼくが辞典屋だからあいつにやっぱりやってもらわないというんで呼びかけがあった。伊東光晴とか浅野栄一とかいう人も学生のころから手伝ってるんです。

細谷　みんな都留さんの関係でしょうね。

杉本　だからこれは文字どおり都留辞典なんです。今度も改訂を頼まれてるんですが，都留さんもいよいよこれがぼくの最後の改訂だっていうんで張りきってますよ。次がまた31年５月から今度は『資本論辞典』の編集と執筆をやってくれっていうわけです。これは随分かかったんだ。５年かかってるんです。31年５月から36年５月まで。

細谷　これはやっぱり本命だからですね，先生。

杉本　そのときの話は前回もしたでしょう。それで岡崎さんの思い出の本（『マルクスに凭れて六十年　自嘲生涯記』青土社　昭和57年）によると，このときのことも書いてあって，ぼくのことを何かいってるんですよ。しかしねえ，あれには岡崎さん，だいぶ記憶違いがあるんだ。あれが本当だと思われるとちょっと困るんだ。

細谷　そりゃそうですね。

杉本　まあ，別に抗議を申しこむ程のものでもないがね。この本は刊行されたから，ぼくが気がついたんだけど，学者の追想録とか，追悼文集なんていうのは非売品が多いから困るんだ。これは法政大学の大島清君の追憶文集（『人生は旅　人は旅人——大島清追憶文集——』発行人　大島章　昭和60年）ですが，こういうのがたくさんある。ぼくはこれ頼まれたけど，去年の２月ごろ締め切りのとき，ぼくはダウンしてたんで書けなかったんです。これを奥さんがつくって配ったんです。こういうのは杉原四郎さんが熱心に紹介するでしょう？

細谷　こういう本はいつか古本屋に出るんですが，やっぱり直後だと出ませんね。私も気がつくたんびにこういうのは買ってるんですけど，これは私も持ってないですね。

杉本　それからあなたが長谷部さんのことを言ってたからこの追悼集（宮川実編『回想の長谷部文雄』八潮書店，昭和57年）を出しといたが。これは宮川実がやったんだか，あまりよくできてないんです。立川の奥の砂川の八潮書店とかで出している。

細谷　ああ，この本は私も古本屋で買いました。

杉本　これは間違いが多くて，人の名前なんか間違ってたり。これは表紙の違うのが２冊あるんじゃない。どういうわけでそうなっちゃったのかな。

細谷　先生また元に戻って，大月の『マル・エン全集』は。

杉本　ちょうど『資本論辞典』をやっている最中にいよいよ大月書店の『マル・エン全集』がはじまったんだ。これ東ドイツで Werke が出はじめたんで，社長の小林直衛さんが張りきっちゃって，どうしてもウチでやるっていうんです。それで『マル・エン全集』には共産党と社会党左派にバックアップしてもらわなきゃあ商売にならない，ていうんで，共産党の方は細川さんに監訳者になってもらうことになった。

程島　嘉六さんですか。

杉本　うん。まあ労農派っていうか，社会党左派は大内さん。大内さんと細川さんなら昔の大原社研の仲間だからちょうどいいということになっちゃった。そこでまず第一に『資本論』の翻訳をどうするかっていうことになったんだ。そしたら『資本論』はなかなかやり手がないんだ。結局，岩波文庫の向坂逸郎訳『資本論』の実際の翻訳者の岡崎次郎さんを射止めてきちゃったんです。『資本論』を岡崎さんに改めて

訳してもらう。これで目玉が決まった。それで大内さんを担ぎ出すには，岡崎さんとぼくが交渉するのがいちばんいいっていうんで，２人で鎌倉の姥ケ谷にあった大内さんの家へ行って，ＯＫをとり，いよいよこの仕事がはじまったわけです。それからはじめのころは大内さんの家や千歳船橋の細川さんの家で編集会議なんかやったんです。

程島　その話は岡崎さんの本にも出てますね。

杉本　それで翻訳する人はその道の第一人者にしたい，そういうのでやったんです。ドイツ版の方は Werke だから著作集なんですが，邦訳の方は全集と名前をつけた。現在，全集という形ではもう完結したんだけれど，今『資本論草稿集』という新しく発見された原稿の翻訳をポツポツやってるんで，まだ関係しているようなかっこうになってるんです。はじめは出口勇蔵さんとか水田洋とか京大の平井俊彦とか関西の連中にも頼んだんです。ただ，あまり分散するとなかなかタイミングが合わなくて原稿集めるのが大変でした。

細谷　でもまあよく全巻出ましたね，これは大したもんですよ。

杉本　村田陽一という外語出のプロ科時代以来の翻訳の名人がいまして，あの人がプロだから割合短期間にワッとやってくれるんです。量的にはあの人がいちばん多いんだ，時事問題のようなものは。

それから『資本論講座』ってのを38年から青木書店でやってるな。これ７冊本ぐらいかな。これ，ぼくはあんまり書いてないんだけど，これは遊部君とか三宅義夫君とか，大内力君も入ってたかな，編集委員が５，６人いたんです。それから40年６月に有斐閣から『マルクス経済学研究入門』っていうのをこしらえてくれっていうんで，これも編集だな。

細谷　１人編集。

杉本　ぼくは序文ぐらいしか書いてないんだ。要するに校閲ですよ。若い人に書いてもらって，原稿直しです。大体こういう仕事なんです。人の原稿を直すっていうのがぼくの大部分の仕事なんです。

細谷　今までのなかで二つ抜けてるのは，一つは『講座信用理論大系』っていうのがあるんです。

杉本　ああ，あれはもっと前だ。本になったのは30年代のはじめですかね。

細谷　出版は31年の１月から６月です。

杉本　だけどいつごろからやったかっていうのは日記でも見ないとわからない。これもしばしば会合してやったはずなんです。

細谷　当然，31年１月刊行ですから，29年ぐらいからだと思うんですが。

杉本　こういうことに関係したはじめのプログラムとか，そういう信用理論研究会の刷りものは大体とってあるつもりなんです。どっかにあるんです。

細谷　ですからこれわかりましたらちょっと後で教えてください。それからもう一つわからないのが，平凡社の『名著大辞典』です。

杉本　これなんかも平凡社が本をくれないから手許にないんですよ。ぼくは買ってないんだ。

細谷　これは私も頼まれていくつか書きました。多分，先生から頼まれたのかもしれません。

杉本　ぼくも忘れちゃった。これ，たしか山田秀雄君が関係してたんじゃない。

細谷　そうだ，山秀さんから頼まれたんだ。それで先生と私で手分けしてやったんです。先生がセリグマンとか，社会科学の辞典をやって，ロンドン・ビブリオグラフィーとかクレスとか，書誌と目録を私が書いたんです。

杉本　ポルグレーブの『経済学辞典』なんかもやったな。平凡社のあの辞典なんか改訂増補版を出せばいいのに。なかなか便利ですよ。

細谷　あれは，ぼくたちが書いたから言うわけじゃないけど，ほかの解題もみんな真面目に書いてます。あれはよくできてますよ。

杉本　あれはぼくももちろん現物を丹念に調べて書いたんです。それから40年に雄松堂の『リカード全集』ですよ，40年8月から刊行委員会が発足して，ずっとやってきたんです。ただし，自分の担当した第5巻が出たのはずうっと経って13年後です。これは大学紛争があいだに入っちゃったからなんです。

細谷　53年に出たんですね。

杉本　53年3月にやっと出たんだ。このあいだ要するに紛争期間です。

細谷　それで，もう一つ大内先生の著作集がありますね。先生は第12巻の「学ぶにしかず」を編集なさいましたね。

杉本　何かあとがきを書かされた。あれはぼくが入院してるときです。

細谷　50年，そうですね，赤坂病院に入ってたときですね。

杉本　赤坂病院に岩波の人が本文のゲラを持ってきて，これで解説を書いてくれって言われ，退院して家で寝ながら書いたんだ，あれ。

菊川　辞典で最後に『大月経済学辞典』。

杉本　あれはぼくは，もうくたびれたからやめさしてくれって言ったんだ，はじめは相談にはのったんですが。だけどあれには全然書いてません。それで一橋の関恒義君がやったんだ。項目の選択なんか少しは助言したと思いますけど。

5　書誌の話，古本屋の話

書誌の話

細谷　それで先生，いつか私たちは，先生の古稀は過ぎちゃったから喜寿ですか，それまでに先生の本をつくりたいんです。

杉本　あと5年待ちです。だけど本なんてつくる材料ないですよ。

細谷　先生は自分では絶対におつくりにならないですから，もうわれわれ弟子が集めますよ。ぼくは書誌学の先生が3人いると思ってますよ。大塚先生と杉本先生，それから京都の天野敬太郎さん，この3人です。ぼくらが大塚先生から聞いているビブリオグラファー，シュタムハマーだとか，ツォーベルだとか，カール・グリュンベルクとか，そういう人をまず経済学者で知ってる人といったら，先生と宇佐美先生，それから関西では水田洋さんと杉原四郎さんぐらいのものでしょう。

杉本　ぼくはまあ，今まで既存のビブリオグラフィーをチェックすることはやってるけど，自分ではなかなかそんなビブをつくってないですよ。

細谷　でも『信用理論』のビブは先生が……。

杉本　あれはもう『信用理論講座』のために大急ぎで限定された範囲でつくった。

細谷　だけどやっぱりあれはほかの人じゃ出きませんね。

杉本　あれももう何十年前で，その後は特に何にもつくってないです。

細谷　ですからそのビブリオグラフィーの話というのは仕事が二つあるんです。一つは先生の書いたものを全部集めて，著作目録をつくり，それから著作集をつくるっていうことがあるんですよ。それはやっぱり先生の喜寿の記念に出きないとね。まあ3年位ですね，準備期間は。そのあいだに先生にも仕事をしてもらわなくちゃあならない。

杉本　えっ。

細谷　ただ先生，それを待ってただけじゃだめですよ。先生にも自分の書いたものを集めていただかなければ。お手伝いはしますから。しかし，先生はいろんな本に序文やあとがきを書いているでしょう。こういうのは困っちゃうんですよね。しかし，それはぜひ思い出して集めてください。それからもう一つは社会科学書誌学です。さっき言ったツォーベルとかカール・グリュンベルグとかシュタムハマーなんかを書誌学者として調べるということはやっぱり先生の専門ですから。私はシュタムハマーを調べにウィーン大学まで行ったんです。だけど結局だめでした。

杉本　シュタムハマーはウィーンの人でしょう。それでウィーン大学でもわからんのかね。

細谷　わからないんです。第一，ウィーン大学の図書館へいったんですが，そこの若い人が「シュタムハマーっていうのは誰ですか」というんですから。それでそのうちに調べて結果を送ってくれるという約束だったんですが，それっきり梨のつぶてです。

杉本　うーん。

細谷　私ももう一度行かなくちゃあと思ってますが，その後全然やってません。そういう社会科学書誌学者やライブラリアンをぜひ先生調べてください。それからもう一つは例のシュトライザントです。

杉本　ああ君からコピーをもらったシュトライザントの自伝 (Streisand, H.: Ein halbes Jahrhundert mit Büchern, 1901-1951. Berlin.) の翻訳ね。

菊川　シュトライザントというのは？

細谷　あの第一次大戦後は，大量にドイツの大学の学者が本を売ったでしょう，インフレで困って。そういうのがみんなドイツの本屋に集まるわけです。そのなかにシュトライザントっていう有名な古本屋がありまして，大原社研の人たちはみんなそこから本を買ったんです。櫛田民蔵とか久留間鮫造とか宇野弘蔵とか。

杉本　向坂さんもそうですね。向坂文庫が今度大原に入ったから，向坂文庫を調べてみたらそのころの古本屋の目録なんかあるんじゃないかな。

細谷　あるかもしれませんね，調べれば。それで向坂さんは戦後もシュトライザントの家へ行って，息子も知ってるし，娘さんも知ってますね。

杉本　未亡人もいたんだ。

細谷　ええ，それで私が偶然，シュトライザントのことを調べて欲しいってナウカに頼んだら，ナウカの安形さんがシュトライザントの書店へ行って未亡人に会ってきたんです。安形さんの話ですとシュトライザントはあの自伝を書いた後，1955年に亡くなって，息子さんは歴史学者だったそうですが，この人も死んで，今，娘さんが宗教学者になって東ベルリンにいるそうです。それでそのとき未亡人からあの自伝をもらってきてくれたんです。あれ先生のところへお送りしましたね。

杉本　うん，あれコピーをとった。

細谷　あれは『経済資料研究』にぜひ翻訳して載せてください。

杉本　うん，やるつもりで本当は分量も調べたけどまだやってないんだ。これからやるよ。あれは一部が書店時代の思い出だね。

細谷　前がちょっと社会思想史の研究みたいですね。それで後ろの9ページが思い出ですね。そのなかに大原社研のことなんかがちょっと出てきますね。

杉本　大原孫三郎とか向坂さんの名前も出てきますから。

細谷　だからこれはあのころの日本の社会科学書の輸入史のいい資料ですね。あの

ころの話というのは，日本側の資料は，久留間さんとか，向坂さん，大内先生，大塚先生とか，いろいろあるんですが，ドイツ側の資料は少ないんですよね。

菊川　日本関係のところだけでもぜひお願い……。

杉本　そう，いや全部訳しても大したことはない。分量としてはちょうどいい。

細谷　それで，あの時代の日本の社会科学書の輸入史のそれに先生がちょっと解説を書けば，いい資料になりますよ。だからそういう先生でないと出きない仕事がたくさんあるんです。それからドイツの昔の社会科学の総合のビブ，あれ何といいましたっけ。

杉本　ミュールブレヒト。(Mühlbrecht, Otto: Übersicht der gesamten staats- und rechtswissenschaftlichen Literatur. Jg. 1～47 (1868～1914). Berlin, Puttkammer & Mühlbrecht, 1869～1914).

細谷　ミュールブレヒトの話は，これも先生じゃないとちょっと出きないんですよ。もうシュタムハマーは知っていてもミュールブレヒトは誰も知らないです。これは先生，ちょっと座談ってわけにはいかないんです。ミュールブレヒトも自叙伝があるんですよ。(Erinnerungen aus dreissig Jahren, 1860—1890. Berlin, Puttkammer & Mühlbrecht, 1890. Xii, 636p. ——Erinnerungen. Neue Folge, 1890～1903. Berlin, 1903. xi, 139p.) ちょうどシュトライザントの前の時代の人ですね，この人は。

杉本　その自伝も面白そうだね。これはもっと調べなきゃあ書けないな。

細谷　これは，先生にどうしてもお願いしたいです。つまり3年のあいだにそういうエッセイをいろいろ書いてどこでもいいですから発表して，それを著作に入れこむっていう形をとるわけですね。

菊川　最初にお話が出たマル・エンの翻訳ビブを補完するっていうのは何ですか。

杉本　あのマルクス＝エンゲルスの著作の邦訳目録（ME書誌編集委員会編『マルクス＝エンゲルス邦訳目録　暫定版』極東書店　ナウカ　大月書店　昭和48年）のことですよ。

菊川　それは先生がおやりになった？

杉本　10年前に，例の新 MEGA がはじまるとき，今，大原の嘱託をやっている渡辺悦次君や村田陽一さんと一緒に記念につくったんです。極東書店やナウカや大月書店が費用を出した。あれはたしか昭和48年の11月ですよ。新 MEGA 刊行の記念に岩波ビルの一室で，方々から借りてきた翻訳の現物をならべて展示会をやったんです。

程島　それを先生が……。

杉本　その現物を見ながらつくったんです。あれはね，大原の内藤赳夫さんが昔つくった『邦訳マルクス＝エンゲルス文献』（昭和5年）というビブがあって，それを

さらにその後の翻訳を入れて，大原で出せって言ったんです。

細谷　そうですね。ええそれはいいことですね。

杉本　大島清君が当時所長だったから，大島君に言ったんだが，大島君はあまり積極的じゃないんだよ。そしたら彼死んじゃって，今は二村君が所長でしょう。

細谷　だから，それは二村さんに話せばいいんじゃないですか。あの人はビブが好きだと思いますから。

杉本　しかもあのとき一緒にやった渡辺悦次君っていう人は労働組合運動史をやる人なんです。彼が大原の嘱託してるんです。

細谷　じゃあ，今チャンスなんですね。だから発表はどこでもいいんですがやはり大原がいちばんいいですね。それを先生と大原の渡辺さんが監修したら，いい仕事になりますよ。

杉本　そうね。あれもやりかけだからやった方がいいな。ただ古いやつの現物をチェックするのが大変だ。単行本だけならいいけど，雑誌のなかに入っていたり，新聞にちょこっと載ったりしてるのがあるんで，大変なんです。

細谷　それは内藤さんから先生へつながる仕事なんですね。しかし内藤さんを顕彰するという意味で，大原の仕事になるんですね。これはその喜寿までにやってもらわないと間に合わない。だからそういう二つの仕事があるわけです。

古書店の話

細谷　それから書物収集のところで，前回ちょっと漏れたところがいくつかあるんです。

杉本　その収集なんて話を前にしましたかね。

細谷　いや，あの飛び飛びに話をしたんですが，ページ数の都合でかなり削られちゃったんです。そこで今日聞きたいのは，古典社の渡辺太郎と辻井さんの話です。

杉本　『図書週報』っていうのを渡辺太郎っていう人が出したんです。この人は沼津の人で住吉町の古典社で出していて，ぼくは昭和10年11月からこれを取ってるんです。週報っていってるけど実際は月刊なんです。これが現物ですよ。

細谷　これは滅多にないもんですね。

杉本　これ１部３銭だよね。

細谷　３銭，何年ですか。

杉本　昭和10年からだからぼくが東大の学生のときです。こういうものが出てるっていうのをどこで知ったか忘れちゃったけど，ともかくこれを１年分か何か払ってた。１年分36銭です。ここに10年11月の142号からあるんです。12年の６月まではこういう版なんですね。それから，162号からまたサイズが変わってこの版になったの。

細谷　よくまあつづいたもんですね。信じられないですね。個人でこういうことをやるとは。

杉本　それでほかの出版物もやってたわけです。14年ぐらいまでやってた。それで大庭柯公の『或る古本屋太平記』なんて，このパンフレットみたいな本ですけど，ここから14年に出してる。これは昔発表したものをまたパンフレットにしたんでしょう。

細谷　驚異ですね。この人は夏目漱石の友人ですね。

杉本　それと『古本売買の実際知識』（昭和6年）とか『明治大正発表禁止書目』なんてのを出していた。

細谷　『古本売買の実際知識』は私も神田の古本屋で見つけて持ってますよ。あの著者の大島逸平という人は渡辺太郎のペンネームですかね。

杉本　さあ，知らない。

細谷　この大庭柯公っていう人は私は大塚先生から聞いたんです。ロシア革命のときに向こうにいた貴重な目撃者ですね。

杉本　彼は新聞記者でしょう。

菊川　ジョン・リードみたいな人。

杉本　『柯公追悼文集』っていう本をぼくは持っている。これは彼がソヴェート・ロシア入りして行方不明になったとき出した追悼文集ですよ。

細谷　先生，これは珍らしい本ですね。

杉本　大正14年に出たんだ。ところで『大庭柯公全集』ってのが出てんの。

細谷　ありますよ。戦前に柯公全集刊行会が5冊出してます。

杉本　この追悼文集はその柯公全集刊行会が出したんだ。これにいろんな当時のジャーナリスト，長谷川如是閑とか土田杏村，鈴木文史朗，なんていう人が書いてるんだ。寒川鼠骨も書いてる。

程島　この人はやっぱり大ジャーナリストだったんですね。

杉本　そう，大ジャーナリスト。

細谷　それで愛書家だそうですね。渡辺太郎さんて人はこの人にいろいろな本を売ったんでしょうね。

杉本　どうだったのかはわからないですが。それともう1冊これだよ。『図書案内』っていうの，これは1934年1号しか出なかったんだけどちょっと面白い本です。例えば目次を見ると「日本国国宝図書目録」「明治大正和歌歌集年表」「数学史著作年表」「平家物語本一覧」「支那刊行支那文学書」「ファシズム文献」「邦文邦訳ヘーゲル文献」「大正社会主義雑誌年報」，こういういろんなものの目録が入ってるんだな。

細谷　豪華絢爛たるものですね。

杉本　「愛書家」「全国儒者没年一覧」「見切り本月遅れ雑誌問屋名簿」とか，「全国収集家名簿」，これにぼくが載ったんだ。ていうのは，この人『図書週報』を買っている人を全部愛書家にしちゃったんだな。

細谷　それはそうでしょう，やっぱり愛書家ですよ。

杉本　その「愛書家名簿」っていうのは別に発売して，それも持ってたんだけどしまいなくしたのか，出てこない。それからそのほかにも『古本屋開業新案内』とか，こういういろんなものを出していた。この『古本年鑑』もそうです。これは8年から4冊出してるんです。

程島　これはきれいな本ですね。

杉本　『図書案内』はあんな函に入れて，しかも函がうまくできていて，このまま第4種で郵送出きるようになっている。

細谷　この人もアイデアに満ち満ちた人ですね。昔は面白い人がいましたね。今はそういうアイデアマンいないですよ。

菊川　この人は先生，その後どうなっちゃったかわかんないですか。

杉本　さあそれは聞いてません。古典社はもちろん今はもうないですけど，渡辺さんがどうなったか知りません。

細谷　渡辺さんのことを私は，『日本古書通信』の八木福次郎さんに会って聞いてみたんです。そうしたら戦前，一度だけ会ったことがあるそうです。

杉本　へえ，どこで。

細谷　昭和11年に神田のお兄さんのところに来て，そのときお兄さんと一緒に会ったそうです。八木さんももう印象が薄れたんで，と言ってましたが，何か弱そうな感じの人だったそうです。それで戦後『通信』が復刊してだいぶ経ってから昭和28年に，住所を住吉町10番地と覚えていたんで，執筆を頼んだら書いてくれたんだそうです。私は八木さんの事務所でその文章を見せてもらいました。（渡辺太郎「人間八木の発見」『日本古書通信』第117号，昭和29年1月。「書き落したこと」『日本古書通信』第118号，昭和29年2月）これはどっちもお兄さんの八木敏夫さんのことをたたえた文章なんです。

杉本　その後はおつき合いはないの？

細谷　ええ，それっきりだそうです。

杉本　この『古本年鑑』なんかは古い大学の図書館では買ってあるでしょうね。

細谷　あると思いますけど，4冊揃ったものはどうですか。

杉本　時々，今でも古本屋の目録に出ますよ。

細谷　そうですか，高いでしょうね。

杉本　いや1冊3千円か4千円位じゃないかな。

細谷　それくらいで買えますか。

杉本　どれくらいの部数を刷ったのかわかりませんけど。

細谷　しかし，やっぱりこの『図書案内』がいちばん面白いですね。

杉本　ともかく，ぼくは18年に伊豆へ行った帰りに彼のところへ寄って会いましたけれど。もう印象は忘れたが，いくつぐらいの人だったかな。

細谷　先生が会ったのは18年が最後ですか？

杉本　それが最後。前にも最後にも一度しか彼に会ったことはない。沼津の狩野川のへりで市街を外れた松林のなかの一軒家だった。戦後死んだらしいんだ。何かで見たんだ。

細谷　28年に『古書通信』に原稿を送ってますから，その年までは元気だったわけです。八木さんは，沼津の古本屋さんに聞いたらわかるかも知れないって言ってました。

杉本　そう，わかるかも知れないな。それで彼も古本の販売はしてたんです。この『図書週報』にも自分のところの販売目録みたいなのがあったんじゃないかな。

細谷　それは当然そうでしょう。こういうのはロマンに満ちてますね。絶対にこういうことは今の人はやりませんよ。この「オオ役ニ立ツ」って書いてある，「大いに」じゃないわけ。「オオ役ニ立ツ」っていうんだから，昔は楽しいですね。

杉本　それがはじめてで，第一年とか何とか書いてあったでしょう。

細谷　今ここで見て驚いたのは，頭のところは日本人のつくった書誌学の論文の索引になってるんですね。

杉本　うん，だからよほど，そういうものを集めて，それを資料にしてこういうものつくったんだと思うんだ。

細谷　この八木さんの昔の『日本古書通信』も面白いなあ。

杉本　だからぼくは，八木さんのところで『日本古書通信』の創刊号からリプリントしたらいいと思うんだ。

細谷　復刻するといいですねえ。

杉本　あれは大正じゃない昭和９年ごろから兄さんの敏夫さんがはじめたんです。戦前のところは昭和16年に『読書と文献』と改題したころからはそろってんですが，その前の『日本古書通信』時代も少しあるんだ。戦後ぼくが，金が切れて払い込みが出きなかったときなんか欠号になっちゃった。これ１年払い込むと表紙を送ってくるんだ，綴じ紐と一緒に。あれ今度製本しようと思ってるんです，そろっているところは。もう30年分ぐらいそろってるはずだ。あれは綴じて積んどくと倒れちゃうんで，製本しないと。

細谷　紙が悪いですから。

杉本　彼が『日本古書通信』に関係したのは昭和11年ですからちょうど半世紀になる。何しろあの雑誌を50年もやってるわけで，偉いオヤジさんで楽しい人だよ。

菊川　どういう経歴か，この人は興味がありますね。

杉本　彼は兵庫の明石の出身で，中学を卒業してから東京へ出てきて古今書院につとめてたんだ。

細谷　私が大塚先生と一緒に神田の古本屋を歩いたのは22，3年ごろですが，そのころの古本屋のオヤジさんには，こういう偉い人が結構いたんです。だから神田を歩いたって楽しかったですよ。今は段々そういう人が少なくなりましたね。

杉本　それからこれ（『文献』昭和3年）は明治堂の目録の創刊号です。明治堂さんとのつきあいといっても，ぼくはあんまりないんです。これは古本か何かで手に入れたんだ。

程島　創刊号はすごいですね。お父さんが出したんですか。

杉本　いや昭和3年で，もう息子の三橋猛雄さんが自分で出した。二十いくつのときでしょう。明治堂という名前は，あの人はお父さんが明治法律学校，今の明治大学の前に店を開いたからつけたんだ。

程島　『文献』は最初っから息子さんがやってるんですね。

杉本　そう，お父さんもそのころ別に和書の販売目録を出してたと思うけど，『文献』は猛雄さんがやってるんです。昭和16年に51号で中止しました。これが全部そろってるといいんですが。

細谷　この創刊号を見るとやっぱり吉野作造さんに書いてもらってますね。そりゃそうですね，お得意さんですからね。三橋さんももう「明治思想史資料解題」を書いてるんですね。

杉本　だから吉野さんの『明治文化全集』が出る前ごろからです。三橋さんの仕事は吉野さんに高く評価されたんですよ。これが戦後復刊したんですが，戦前の最後がこの51号なんです。16年まで出してたんだ。昭和6年のこれは何号だろうな。これを見ると当時の相場も，どういう本が出たかってこともわかるんだ。

細谷　これ販売目録のほかに論文索引もありますね。

杉本　いやはじめの方だけですよ，論文索引は。

細谷　しかし，こういうものに論文索引が出てるっていうことはほとんどみんな知らないでしょうね。

杉本　そうだろうね。

細谷　こういうもの見ると目の毒ですよね。

杉本　うん，昔はこういう本がこれくらいの値段だったっていうのがわかるんで……。

細谷　やんなっちゃいますね。いくらでもいい本が転がってた。

杉本　戦後『罹災復興開店案内』ってのを出したんだ。

細谷　これはまたすごいです。

杉本　これは21年９月，それで『文献』の再刊（『文献』再刊第一号　邦文現代社会科学古書目録）が25年４月ですから，５年経ってるんですよ。

細谷　この辺りも歴史的なもんですね。

杉本　だから三橋さんが自叙伝みたいなのを書けばいいんだけど。『日本古書通信』に断片はときどき載ってますけど。

細谷　明治堂は空襲で焼けたんですね。

杉本　そう，店は駿河台の明大前の本店と，それから日本橋の丸善の斜め向いの山本山の２階でもやってたんです。あの支店は３月10日にやられたんです。

細谷　４月13日は本店と猿楽町の自宅と両方やられたんですね。

杉本　自宅も？

細谷　ええ，一部は疎開したんですけれど……。だから２度でほとんど全部やられちゃった。

杉本　ええ，それまでに集めた明治文献を焼いちゃったんだ。

細谷　いいものはみんな猿楽町の自宅にあったんです。三橋さんの戦前の明治の社会科学書のコレクションは土屋喬雄先生のお世話で東大経済学部へ売ったんです。その後集めたコレクションが焼けたんですね。今度東経大へ入れたのは結局３度目のコレクションです。

杉本　あっ，東経大が買ったの。

細谷　ええ３回目の最後の収集です。あの人は大倉高商出身ですから。

杉本　あっ，そうか。母校へ入れたのか。あの人，自宅は狛江でしょう。

細谷　ええ，私も土屋喬雄先生のコレクションが一橋大学に入ったときに，三橋さんにその評価をお願いした縁で何回か狛江にうかがいました。書斎に通されると後ろの書棚一杯に例の明治文献コレクションがずらっとならんでるんです。私は，三橋コレクションは学問史，思想史，土屋コレクションは経済史が中心ですから，両方合わせれば素晴らしいと思い，何とかして一橋大へ入らないかと思ってました。それで時々ちょっと口に出すんですが，三橋さんは，まだ元気なうちはこうやって眺めていたいからって言うんです。

杉本　手離せない。

細谷　ええ，離したくないと。そしたらたしか今年ですよ……。

杉本　東経大に入っちゃったの。

菊川　はい。

杉本　誰が交渉したの？

細谷　あれは誰ですか，あいだに入った方，誰か聞いてませんか？

菊川　ええ，ちょっと聞いてませんが。

杉本　じゃあ，いずれ目録をつくるんだろうな，三橋文庫で。

細谷　それはそうですけど，今は三橋さんの書いた例の『明治前期思想史文献』（昭和50年）を切って，一応目録にするそうです。

杉本　あれのコピーをつくって…。あれに載っている本が全部入ったの。

細谷　ええ，そうです。あれ以上くわしい目録は出きっこないですから。

杉本　あれは解題つきだからね。

細谷　その解題がすごいです，もう完璧ですから。だから三橋文庫っていうのは目録作成費がいらないんです。この目録がついているというので1千万円以上安く買ったことになりますね。

杉本　三橋さんの息子が武蔵大学を出てんだけど一生懸命やってんのかね。

細谷　息子さんもぼくは知ってますよ。

杉本　今，番頭の加藤君っていうのがやってるの。

細谷　一緒にやってますよ。息子と番頭さんが土屋先生のところへ目録づくりにずっと通ってたんです。

杉本　あっ，そう。

細谷　それでリストをつくって値踏みはお父さんがしたんです。

杉本　そうか，じゃあ，一橋も土屋文庫として独立のコレクションで整理するの。

細谷　ええ，そういう約束ですから。

杉本　じゃあ，目録をつくるんだね。

細谷　ええ，ですけどだいぶ先です。それで支払いは5年年賦なんです。

杉本　じゃあ，全部現物は入ってないの。

細谷　ええ，ですから今までに4回分入ってます。後1回今年の暮に入れて，それで終わりです。

杉本　じゃあ，ぼくが生きてるあいだに目録はできるかな。

細谷　さあ，何しろ何万という数ですから，10年ぐらいかかるんじゃないですか。10年だったらまだ先生，大丈夫ですよ，元気ですよ。それで，国分寺の東経大が三橋文庫でしょう。隣の国立が土屋文庫ですから，明治の日本経済史や経済思想史の研究者は楽ですよ。電車の駅ひとつでもって両方使えるんですから。またこの二つはあんまりダブらないんです，意外と。というのは三橋さんのは……。

杉本　思想史ですからね。あっちは本当の史料……。

細谷　ええ経済史史料ですから。つまり明治，大正の研究史料は土屋文庫と三橋文

庫を合わせれば，これ以上のものはもう出ないです。

杉本　出ない，もう出ないね。

細谷　そうですね。それで私があいだに入りまして，三橋さんと土屋先生が戦後はじめて土屋先生のところで会って，やあやあなんて昔話をして楽しかったですよ。

杉本　戦後はじめて。土屋さんはもう戦後はちっとも歩かなかったのかな。

細谷　もう何しろあの収集の目玉のところは戦争前にほとんど集めたんです。

杉本　ぼくは三橋さんに例の大原社研と金融経済研究所が合同でやった『本邦会社史目録』（昭和37年），あれをあげました。明治のああいう文献は割合翻訳が多いんだけど，元になった本がどういう本で何版かってことを昔の本には書いてないんで困るんだなあ，あれ。

細谷　あの，大正は関西大学の平松系一郎さんがやってますね。（平松系一郎編『大正期経済関係翻訳書目録』関西大学経商資料科室，昭和56年）。

杉本　うん，彼ね，平松君。あれ大正は一段落したが，あれでもなかなか調べがつかないのがあるんだ，やっぱり。

細谷　ありますね。つまり原典が全然わからない。

杉本　原典を昔の訳本は書かないもんだから。しかも何版かわからんようなのがあって困るんだな。ぼくも少し調べてわかったのを教えてあげたんですが。

細谷　今，慶応の東田全義君っていう図書館の参考課長もぼつぼつそれをやってます。やっぱり１人じゃとても無理ですよ。みんなで手わけしてやんないと。

杉本　でも大正だけでもあれだけよくやったなあ。これから引きつづきさかのぼる方でやるんですかね，昭和をやらないで。

細谷　そのつもりだと思いますね。昭和よりもそりゃ明治をやってもらった方が……。

杉本　ただ明治は現物が分散してるから大変になると思う。

細谷　年が経つとだんだんむずかしくなりますね。ああいうのは経済資料協議会でやって出せればいいですね。いい仕事になりますね。

杉本　あの当時は偶然に入ってきた外国の本をテキストにしていて，その原本自体は大した本でないのを使ってるから困るんだな。そんな本なんかあまり保存されてないから。ぼくなんかも今までに経済雑誌社の蔵書だった経済学書なんかにぶつかったけれど，ああいう風にその昔は１冊しか入ってこない本を廻し読みしたりしているんで，当時の原本がそう日本にはないと思う。一過性の本だから。外国でももうそんな本は廃棄しちゃったような本で。そりゃあミルとか何とかはいいですけれど……。

細谷　有名な学者ですもの。

杉本　だからああいう翻訳原文とテキストの色んな本を対照して，原本はこの本だ

っていうことを確定しなきゃならないから厄介だ。

細谷　先生すみません，もう一つだけ教えていただきたいのは京都の辻井甲三郎さん。

杉本　あっ，辻井さん，これは例の古本屋分布図をつくった人。これは『全国主要都市古本店分布図集成』という長い題なんだ。

細谷　何年に出たんですか。

杉本　14年版というのがはじめてなんです。

細谷　戦前の最後ですね。そりゃあいい版ですね。

杉本　ガリ版なんですよ，これ。昭和14年4月26日印刷完了，5月5日納本，5月20日発行。頒価50銭ですが，発行者は大将軍鷹司町の辻井甲三郎って人なんです。この人は，偶然ぼくが細川君に頼んで京大の同窓会名簿の古いのをもらって調べたら，昭和6年の京大経済学部卒業なんだ。それから松江高校卒，死亡なんだ。もう死亡してるんです。

細谷　先生がお会いになったときは……。

杉本　いやぼくは会ってないんです，辻井さんには。

細谷　そうですか。私が八木さんに聞きましたら八木さんは一度京都の辻井さんの家を訪ねていますね。何で訪ねたかもう忘れたそうですが，たんすのなかに資料をしまってあったのでびっくりしたそうですよ。何か中学校の先生のような印象だったって言ってました。

杉本　それは戦前？

細谷　ええ，戦前です。

杉本　だから年はまあ機械的にいえばぼくより6つ年上だからまだ80にもならないが，いくつぐらいで死んだかわかんない。

細谷　ああそうですか。

杉本　これ発行は雑誌愛好会っていうんです。辻井さんがこれをやってた。180部印刷で，ちゃんと辻井っていうハンコが押してあるんだ。

細谷　メンバーを限定したんですね。

杉本　ぼくはこの地図を頼りに戦争中古本屋歩きをやったんだ。

細谷　これは貴重資料ですね。

杉本　これをつくるために協力者が各地にいて名前が全部書いてあるんだ。

細谷　ああ，かなり組織的にやったんですね。

杉本　『分布図』は「東京プロパー」，「大東京西半部」，「東京江東」の順。

細谷　手書きですね。

杉本　手書きガリ版，これがその神田古本街だ。

細谷　これは楽しいですね。

杉本　「神田古本店街西部」，『日本古書通信』の広告が出てる。それからこれ「本郷」。悪いことにぼくは後で書き加えたりして直したんだ。かえってこれの歴史的価値をなくしちゃったんだ。

細谷　まあこりゃしょうがない。「早稲田」はすごかったですね。びっしりならんでたんですね。今は全然ありゃあしない。

杉本　「渋谷駅近傍」，それから「西南地区」，これ世田谷です。それから「慶大」「六本木近傍」「池袋」，それから後「横浜」とか……。

細谷　飛んで「名古屋」。

杉本　それから「仙台」「新潟」「神奈川」。

細谷　全国のが……。

杉本　これ植民地もあるんだよ。「満州」があるんだよ。

細谷　楽しいですね。

杉本　この裏に地元の連中が奉天，大連なんかの解説をしている。

細谷　へえー，いいですね。

杉本　江東，神田，本郷，横浜，仙台，新潟なんか……。

細谷　これは読物としても楽しいわ。

杉本　金沢，静岡。まあその報告の仕方はその土地の通信員の個性があるからいろいろ書き方はさまざまですが……。

細谷　それはかえって面白いですね。

杉本　14年にね，これを持って地方の古本屋廻りをしたんだ。

細谷　先生，その辻井さんていう人は古本屋さんですか。

杉本　いや，違うと思う。雑誌愛好会っていうんで，正体はわからんですよ。昭和6年に京大の経済学部を出て，こんなことを自宅でやってた。これも奇人の類かもわからんけど。この同窓生か何かの生き残りに聞いてみればどういう人かわかるかも知れない。6年卒ですからまだいるでしょう。

細谷　臨川書店とか京都の古本屋さんに聞いたら。

杉本　臨川か，あの。

細谷　本屋さんに聞くよりしょうがないです。

杉本　ところが京都の社会運動家で辻井民之助って人がいるんです。関西の社会運動の相当な人物，その辻井民之助と関係のある辻井かどうかなんです。これは細川君に調べてもらうよりしょうがないです。

細谷　そうですね。じゃあ細川さんに頼みましょう。

杉本　ぼくは，11月の祭日の3，4日かな，何日かに立命館で経済学教育研究会と

いう会の創立大会があるんですが，そこへ出席するんです。そこでぼくのゼミの教え子の国分寺高校の先生が報告するんですよ。だから彼の応援の意味もあって京都へ行こうと思っているんで，細川君に会ってこれを調べてもらうつもりです。

細谷 先生，そのとき臨川にも寄って，調べてもらったらどうですか。どうも戦前にはこういう謎のかなり面白い人物が，何人かいるんですね。これからそれを発掘する楽しみがある。

杉本 辻井甲三郎はそれだけでなく，『雑誌愛好』っていうガリ版のものを出してて，この地図を買ったらそいつを送ってきたんだ，一緒に。それが少し残ってるんです。

細谷 それも先生ぜひ見せて下さい。

杉本 それを持ってきましょう。

菊川 本屋であるかどうか，そりゃあわからないですね。普通こういうことをするのは大体本屋なんでしょう。

細谷 それから臨川は脇村さんが相談役になってますので知ってるかも知れませんよ。

菊川 うちの会長，ご存じかな。

細谷 ちょっと脇村先生に聞いてみて下さい。先生喜びますよ。それからもうひとりの本屋さんがいましたね。

杉本 守田有秋。この人は山川均の自伝に出てくるんだ。守田有秋って人は大正になってから社会主義的な外国の文献の輸入をやった。それで古い社会主義者だってことはぼくも知ってたんだ。ところがそれを何かで読んだ，その本の記憶が出てこなくて，それでしょうがないからこの塩田庄兵衛の『社会運動人名辞典』を見たら，独立項目にはなくて索引で出てきた。それで引いたら山川均のところで出てきた。

細谷 ああ，よかったですね。

杉本 本名は守田文治っていうんです。後で有秋と改名したんだ。「秋山宅で知り合った守田文治（有秋）らと小雑誌『青年の福音』を発刊し，3号掲載の守田執筆山川加筆の皇太子，大正天皇結婚を批判した“人生の大惨劇”が不敬罪に問われ，重禁錮三年六ヶ月，罰金百二十円，監視一年に処され，1901年から巣鴨監獄に入った」と書いてある。秋山というのは秋山定之輔という政治家です。

細谷 ああ，くわしいですね。

杉本 山川均はこの不敬罪で監獄に入ったとき，スミス，リカード，マーシャルを勉強したんだ。1904年に出獄したから3年入ってたんです。守田も一緒に入ったんです。そこで『山川均自伝』を見たら，くわしくその不敬罪で守田と一緒に入った話が出てるんだ。それでぼくもこの守田っていう人がそういう社会主義文献の輸入をやっ

たっていうのを何かで読んだ記憶があって，前の座談会のときに日本の外国書輸入史もちゃんとしたものがあるべきだって言ったんだ。

細谷　まあ，これは後で調べてみますけど。

杉本　それで『自伝』には「私の出獄後なお数ヵ月守田の保釈は許されなかったので，森田は三十四年の正月を未決監で迎えねばならなかった。」なんて書いてあるんですよ。この不敬事件というのは，大正天皇と大正天皇の皇后になった九条節子さんの結婚のとき，はじめ本人は嫌だっていうのに，大正天皇に見合をさせたのは人権蹂躙だとか何とか書いたんだ。それが不敬罪になっちゃった。

菊川　それで3年の刑になったんですか。

細谷　そのころだったらあたり前ですよ。

杉本　この守田っていう人が，大正に入ってから何かそういう社会主義文献の輸入をやったんだ。それで山川菊栄さんの「あとがき」によると終戦の年の20年に死んだらしいんだ。

細谷　じゃあ，ずいぶん長生きしたんですね。

杉本　しかし山川よりは早く死んだ。山川は33年に死んだ。ぼくはよく電車のなかで一緒になりました，あの人は背が低くて。菊栄さんも死んだんだな。藤沢のちょっと大船の方へ行った弥勒寺っていうとこに住んでいた。ところで勁草書房の山川均の全集っていうのは中断しちゃったんでしょう。菊江さんの方がちゃんと出ちゃったんじゃない？

細谷　中断じゃないんです，まだ継続中です。

杉本　山川均の全集なんていうのは早く出た方がいいと思いますよ。

細谷　だけど先生，山川均が偉いといったって，全集となったらなかなか売れませんよ。

杉本　それは売れないだろうね。買うのは昔を知ってる人ばっかりで。

細谷　よっぽど特殊な人ですよ。

杉本　戦後の人なんかてんでもうね。

細谷　経済学者だってまず買いませんよ。

杉本　堺利彦だって戦前に改造社で出したんだけど。

細谷　その全集は持ってます。

杉本　ただあれはまだ編集が完全じゃないでしょう。

細谷　ええ。この人も完全な全集の欲しい人ですね。

杉本　これは紀伊国屋の戦前時代の月報ですよ。

菊川　表紙のデザインなんかすっきりしていいですね。

杉本　バウハウス調なんだ。これはじめ『月報』という名で出ていて途中で中止さ

れ，その後『レツェンゾ』という文芸雑誌に変ったんです。その『レツェンゾ』は2年で廃刊し，また『紀伊国屋月報』になったんです。これはぼくも完全にそろったのは持ってません，欠けてます。現在，紀伊国屋にこういうものそろってあるのかなあ。吉枝君に聞けばわかるかなあ。

細谷　さあ今どうですか。私は戦後，紀伊国屋の洋書の輸入がはじまったころ，少しお手伝いしたんですが，そのころは『紀伊国屋月報』が『机』という名前に変ってました。私はその『机』にイギリスの社会経済思想史のビブリオなんかを連載したことがありますが，その後その『机』がどっかになくなってしまったので紀伊国屋にあるかと思って吉枝さんに聞きましたら，やはりそろっていませんでした。7，8年前のことですよ。結局，吉枝さんが自分のをもってきて補充したんです。

杉本　『机』は北園克衛さんが編集してたな。あの表紙もなかなかセンスがあったね。いつか紀伊国屋は50年の略史みたいなもの（『創業五十年記念誌』昭和52年）を出しましたよね。あの本屋は昭和になってからはじめたんだからもうじき60年でしょう。だからもっと完全な社史を出せってぼくは言ってるんです。

細谷　あれっ。この『月報』の昭和8年に向坂先生が書いてますね。

杉本　だからこの雑誌がどこかに全部揃ってないかと思うんだ。

細谷　会社にはないかも知れませんね。とにかく吉枝さんに聞いてみましょう。

杉本　ぼくも死んじゃったらこんなものは紙クズになっちゃうから，こういうの今のうちに紀伊国屋に寄贈するよ。ナウカにはこのあいだぼくの持ってた戦前の月報を全部あげたんだ。これがそのときのリストだ。ナウカは大竹博吉さんが東洋キネマの少し手前の場所ではじめた店ですが，『ナウカ社月報』の創刊号は昭和9年の9月なんだ。

細谷　店を出したのは，今の神田の店にいる雨宮潔さんの話では恐らく昭和6年だろうというのです。大竹さんを追想した『遺稿と追憶』を見ても，その辺のことははっきりしてないんです。

杉本　そうですか。そうすると『月報』を出したのはだいぶ後だな。それでぼくの持っていたのは昭和11年8月に出した号までで，これは何号って書いてないんだ。

細谷　大竹さんはその年の7月に治安維持法で捕まって，ナウカはつぶれましたから，多分その号が最後でしょう。

杉本　それでちょっとわからないのは，11年の4月に『ナウカ』という20ページの

雑誌が出てるんです。その第1ページの頭には「多喜二全集普及版によせて㈠」となっているんです。ところが同じ4月に『ナウカ社月報』も出ていて，この最初のページの頭が「多喜二全集普及版に寄せて㈢」となってるから，ぼくはナウカにも手紙で書いてやったんだが，多分この『ナウカ』という雑誌は第1巻第1号となってるけど，1号だけで，後は出なかったんでしょう。

細谷 ああ，それは私が，ナウカの月報の『窓』の編集をしている宮本立枝さんに聞いたら，そうじゃないかって言ってましたよ。先生が寄贈するまでナウカにはこの『月報』がなかったんですね。だから宮本さんはとても喜んでましたよ。

杉本 紀伊国屋もそうだけど，ああいうのは案外出したところは持ってないんだ。

細谷 ナウカは戦前から戦後，大竹さんが捕まったり，いろんなことがあって，会社が出きたりつぶれたりしてましたからそりゃ無理ですね。今，宮本さんはナウカの出版した書物の総目録をつくってますが，やはりなかなか大変のようですよ。

杉本 それからいつか雄松堂の編集部の人に戦前の君んとこの目録がある程度あるよといったら，雄松堂の新田が聞いてぜひ見せてくれ，貸してくれとか言ったんで貸してやったことがある。この雄松堂は，巌松堂から独立した当時は日本の詩書，『アララギ』とかそういうのを手掛けてた。ところがそれが，今はともかく，当時はあんまり商売にならないから，資本主義論争の影響で社会経済史料が盛んに売れるんでそっちの方へ転換したんだ。それで戦後はああいう風にバックナンバーからはじめてだんだん大きくなったんだ。

細谷 もう本当に先の見通しのいい人ですね。

杉本 ただ，高かったんです，ここの本は。『職工事情』をガリ版で出してたんで，ぼくはそれを買ったんだ。戦後また売っちゃったですが。

細谷 やっぱり巌松堂から出た人はしっかりしてる。

杉本 ま，そういうタイプ。巌松堂のオヤジね。あのオヤジさんは死んだけど。

細谷 実にたくましく稼ぐ方でした。だけど，中味もよく知ってましたね。やっぱり偉いです。しかし先生，この雄松堂の目録の『竹帛』というのは珍らしいですね。

杉本 『竹帛』……。「名を竹帛に垂る」の『竹帛』で，『アナウンスメント』っていうのを1号出したり，後に『資料目録』っていうのが1冊あるでしょう。これ後いつごろまで出したかぼくは知らないんだ。ぼくは送って貰ってたんだけど，そのうちあんまりあそこの値段が高くって買わなかったもんだから，送ってくれなくなっちゃったんです。

細谷 そんな，いくら買わないっていっても…。これはいつ出したんですか。何，昭和12年，ああもう昭和12年じゃあ，だめだ。大体ね，土屋先生なんかは昭和一けた時代にもう集めちゃってる。

杉本　そうですよ。

細谷　昭和一けたまでですね，本当の勝負は。

杉本　そのころは安かったんだ。やる人いなかったから。ぼくらがこんなものを漁り出したのは資本主義論争の影響ですから。『本邦小作慣行』とかああいうもの。

細谷　もうそのころは上がっちゃって。

杉本　それから岩手県が出した名子のナントカ部落の資料なんていう史料，ああいうものもぼくは集めてたんだが。

菊川　そろそろ時間ですが，先生もだいぶおつかれのようですからこの辺で……。

細谷　そうですか。まだ聞きたいことがたくさんありますが，これで終わらせていただきます。先生，今日はどうも長時間貴重なお話をうかがいましてありがとうございました。

杉本　いや，どうもみなさんご苦労さまでした。

おわりに

この聞き書の完成のためにお世話になった武蔵大学図書館の丸田政文，武蔵高等学校の前事務長矢代源司，東洋経済新報社の山口正，田中淑恵，ナウカ社の安形光夫，雨宮潔，宮本立江，『日本古書通信』の八木福次郎，明治堂書店の三橋猷雄，加藤武志，の諸氏，また原稿の浄書，そのほかの仕事でお世話になった東京経済大学図書館の古在重代さんに厚くお礼を申し上げます。　（細谷新治）